

富山県南砺市

院林遺跡Ⅱ  
寺家廃寺跡Ⅰ

—主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う  
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)—

2008年3月

南砺市教育委員会

富山県南砺市

# 院林遺跡Ⅱ 寺家廃寺跡Ⅰ

－主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う  
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)－

2008年3月

南砺市教育委員会



寺家废弃寺跡出土遗物

## 序

南砺市は、富山県の南西部をしめ、市内にはユネスコ世界遺産に登録された五箇山の合掌造り集落を代表として、数々の文化財が残されています。また旧石器時代から近世まで様々な時代の歴史的遺産が埋蔵かれています。

南砺市教育委員会では主要地方道砺波福光線の改良工事に先立ち、昨年度に引き続き寺家・院林地内で発掘調査を行いました。本書はその調査成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究に活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県土木部、南砺市シルバー人材センター、地元院林地区、寺家地区の皆様には多大なご協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成20年3月

南砺市教育委員会  
教育長 梶桐角也

# 例　　言

- 本書は主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う発掘調査概要である。
- 調査は富山県土木部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。調査面積は院林遺跡が1,560m<sup>2</sup>、寺家廃寺跡が1,460m<sup>2</sup>である。
- 調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長林浩明、文化財保護主事片田亞紀が調査事務を担当し、文化課長中島眞貴が統括した。調査の担当及び本書の執筆は文化財保護主事佐藤聖子、片田亞紀が行った。
- 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表す。  
梅基助弘、梅基範大、重原達雄、柴田義明、㈲清水重建、㈲福光石工、森田秀一、吉田清次
- 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄1967「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社を用いた。
- 調査参加者は次のとおりである。

石崎恵紀雄、井口範子、下村忠行、高下久義、竹田洋子、中田睦子、橋本澄子、林長敏、廣川稔、水口善嗣、  
溝口日出夫、守山賛二、安田信弘、山田澄乃、山田善之、吉田信一（現地作業員）  
木下陽子、西川和美（補助員）

# 目　　次

I 位置と環境 .....	1
第1図 位置と周辺の遺跡 .....	1
II 調査に至る経緯と経過 .....	2
第1表 遺跡の概要 .....	2
第2図 遺跡範囲と調査区位置図 .....	3
III 調査の概要 .....	5
1 調査の方法 .....	5
第3図 院林遺跡3地区の調査区割 .....	6
2 院林遺跡3地区の概要 .....	6
第4図 院林遺跡3地区の基本層序 .....	6
3 寺家廃寺跡1地区の概要 .....	8
第5図 寺家廃寺跡1地区の基本層序 .....	8
第6図 寺家廃寺跡1地区的調査区割 .....	8
IV まとめ .....	12
参考文献 .....	12
第7図 院林遺跡3地区平面図 .....	13
第8図 院林遺跡3地区的遺構（1） .....	15
第9図 院林遺跡3地区的遺構（2） .....	16
第10図 院林遺跡3地区的遺構（3） .....	17
第11図 寺家廃寺跡1地区平面図 .....	19
第12図 寺家廃寺跡1地区的遺構（1） .....	21
第13図 寺家廃寺跡1地区的遺構（2） .....	23
第14図 寺家廃寺跡1地区的遺構（3） .....	24
第15図 寺家廃寺跡1地区的遺構（4） .....	25
第16図 寺家廃寺跡1地区的遺構（5） .....	26
第17図 院林遺跡3地区的遺物（1） .....	27
第18図 院林遺跡3地区的遺物（2） .....	28
第19図 院林遺跡3地区的遺物（3） .....	29
第20図 寺家廃寺跡1地区的遺物（1） .....	30
第21図 寺家廃寺跡1地区的遺物（2） .....	31
第22図 寺家廃寺跡1地区的遺物（3） .....	32
第23図 寺家廃寺跡1地区的遺物（4） .....	33
第24図 寺家廃寺跡1地区的遺物（5） .....	34
第25図 寺家廃寺跡1地区的遺物（6） .....	35
図版1 院林遺跡3地区全景 .....	36
図版2 院林遺跡3地区的遺構（1） .....	37
図版3 院林遺跡3地区的遺構（2） .....	38
図版4 院林遺跡3地区的遺構（3） .....	39
図版5 寺家廃寺跡1地区的遺構（1） .....	40
図版6 寺家廃寺跡1地区的遺構（2） .....	41
図版7 寺家廃寺跡1地区的遺構（3） .....	42
図版8 寺家廃寺跡1地区的遺構（4） .....	43
図版9 寺家廃寺跡1地区的遺構（5） .....	44
図版10 寺家廃寺跡1地区的遺構（6） .....	45
図版11 院林遺跡3地区的遺物（1） .....	46
図版12 院林遺跡3地区的遺物（2） .....	47
図版13 寺家廃寺跡1地区的遺物（1） .....	48
図版14 寺家廃寺跡1地区的遺物（2） .....	49
図版15 寺家廃寺跡1地区的遺物（3） .....	50
図版16 寺家廃寺跡1地区的遺物（4） .....	51
図版17 寺家廃寺跡1地区的遺物（5） .....	52
図版18 寺家廃寺跡1地区的遺物（6） .....	53
図版19 寺家廃寺跡1地区的遺物（7） .....	54
図版20 寺家廃寺跡1地区的遺物（8） .....	55

報告書抄録

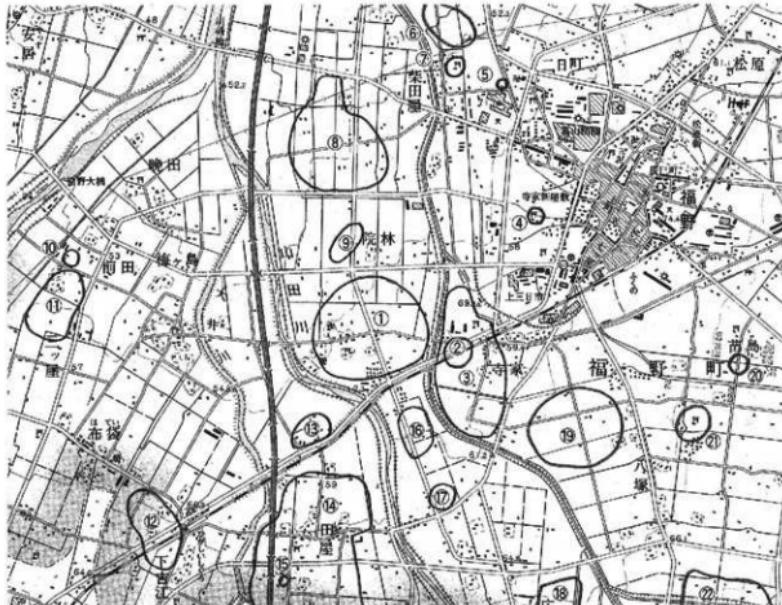
## I 位置と環境

富山県の南西部に位置する南砺市は、2004年11月に町村合併で成立した市であり、西を石川県金沢市、白山市、東を富山市、北を小矢部市と砺波市に接する。旧井波町と旧城端町は門前町として、旧福野町と旧福光町は市場町として栄え、人口の大半は平野部に集中している。

地形的には、呉羽丘陵、蟹谷丘陵といった低丘陵と、険しい山々が連なる飛騨山地に囲まれ、平野部は庄川と小矢部川によって形成された複合扇状地が広がる。庄川は旧莊川村の山中峠の湿原を水源とし、全長は約115kmで、日本でも最大級の庄川扇状地を形成している。小矢部川は庄川扇状地の勢いに押されて、砺波平野の西端部をゆるやかに流れ、庄川の排水河川の役割も果たしている。この一帯は屋敷林に囲まれた農家が水田の中に点在する散村景観が広がり、西日本の平野部に認められる環濠集落に代表される集村景観と対比され、全国的に有名である。

院林遺跡は、南砺市の北部、旧福野町内の大字「院林」と「寺家」地内に所在する。小矢部川の支流である旅川と山田川に挟まれた標高56~58mを測る段丘の縁辺部に立地する。史料によると、この辺りは古くから集落が成立し11世紀後半頃には院林郷が成立した。院林郷の地頭職は度々の停止、安堵を繰り返し、院林氏により世襲された時期もあったと考えられる。しかし14世紀を最後に院林氏の名は文献史料では確認できず、この後没落していったと考えられる。

寺家廃寺跡は院林遺跡の旅川を挟んだ東側に隣接する。寺家地区の日吉社に備柱礎石、水田に塔心礎と考えられる礎石が残っている。それぞれ、「夫婦岩（要岩）」、「皇孫塚（鏡石）」と呼ばれ、市の文化財に指定されている。寺院に関しての記録はないが、礎石の型式や周辺の採集遺物から平安時代の建立と考えられる。(片田)



第1図 位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

1. 院林遺跡
2. 寺家廃寺跡
3. 寺家遺跡
4. 寺家新屋敷館跡
5. 礼拝塚
6. 柴田屋北浦遺跡
7. 柴田屋館跡
8. 柴田屋川西遺跡
9. 院林北遺跡
10. 前田館跡
11. 前田遺跡
12. 下吉江遺跡
13. 田尻北遺跡
14. 田尻遺跡
15. 田尻丸塚
16. 広安北2遺跡
17. 広安北1遺跡
18. 広安南遺跡
19. 八塚遺跡
20. 苗島神明社遺跡
21. 八塚神明社遺跡
22. 八塚殿林遺跡

## II 調査に到る経緯と経過

主要地方道砺波福光線は、富山県西部の砺波市、南砺市福野、福光の中心市街地を結び、国道156号と国道304号を連絡する総延長約12.8kmの幹線道路である。また、北陸自動車道の砺波ICと東海北陸自動車道の福光ICへのアクセス道路となっている。しかし、幅員狭小で慢性的な渋滞があり、歩道を整備し歩行者の安全を確保する等の面から、早急に整備することが求められ、順次改良工事が行われている。寺家地区から田尻地区の区間1.4kmでは平成12年に都市計画がなされた。この区間には住宅密集地があり、南にJR城端線が並行して走っているため現位置での拡幅余裕がなく、新たに北側に幅20mの道路を建設するものである。その後平成14年には事業採択がなされ調査、設計、用地交渉などが始められた。

バイパスルート上には、周知の遺跡として寺家遺跡、寺家廃寺跡、院林遺跡、田尻北遺跡が存在する。しかし、道路起点と終点位置の制約などによって路線位置はおのずと決定され、遺跡を回避する事は不可能であったため、遺跡の保護策については記録保存対応とならざるを得なかった。

平成16年3月、当時の福野町教育委員会は富山県の依頼を受け、道路用地買収を完了した寺家遺跡の一部で、また平成17年9月には、南砺市教育委員会が旅川以西の延長400mの区間、院林遺跡で試掘調査を実施し、対象区域の全域にわたって古代～中世の遺構・遺物が存在することを確認した。これらの調査結果を受け、富山県と南砺市の間で協議し、路線内の遺跡が遺存している箇所について、本調査を行うことになった。以降、試掘調査と並行して平成18年3月から本調査をおこなっている。なお平成19年には田尻北遺跡の路線内を試掘したが、遺構は確認しなかった。

本調査面積は、次のとおりである。(片田)

平成18年度	院林遺跡 1 地区、2 地区	4,300m <sup>2</sup>	(民間調査会社へ委託)
平成19年度	院林遺跡 3 地区	1,560m <sup>2</sup>	(南砺市教育委員会直営調査)
	寺家廃寺跡 1 地区	1,460m <sup>2</sup>	( )

第1表 遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
院林遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	須恵器、土師器、珠洲、青磁、白磁、木製品、硯、刀子
寺家廃寺跡	古代	柱穴、土坑、溝	須恵器、土師器、礎石
寺家遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居？、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	須恵器、土師器、青磁、珠洲、近世陶磁
田尻北遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、土坑、柱穴、溝	須恵器、土師器、珠洲、近世陶磁



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (1:5,000)

### III 調査の概要

#### 1 調査の方法

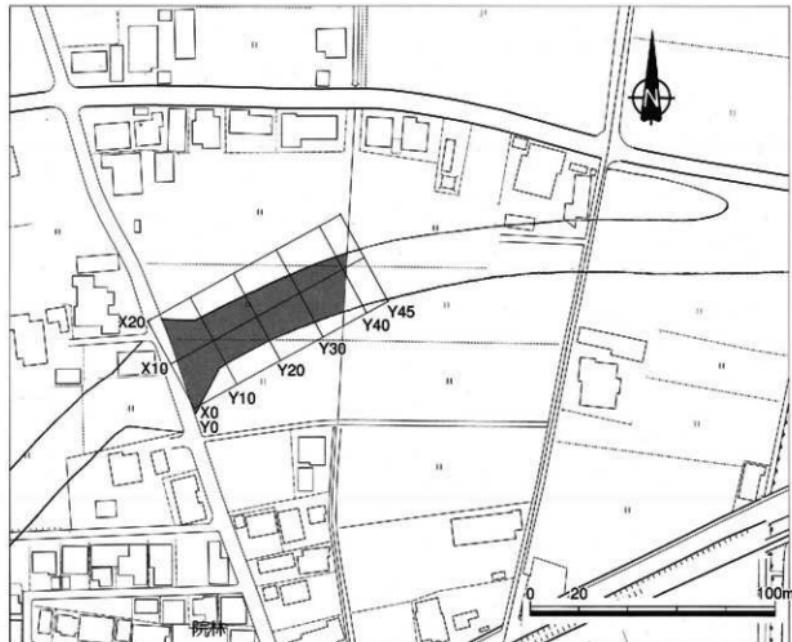
調査区域の設定後、試掘調査の結果に基づき、調査員の立会いのもとで表土除去を行った。表土除去には重機を使用し、耕作土及び、近～現代の盛土の層まで掘削した。耕作土と盛土は分けて調査区の外に搬出した。

表土除去後に、調査区に合わせたおおよその東西方向、南北方向に基準杭を設置して調査区割りを行った。区割りは南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字で表記した。

調査区に合わせてサブトレーンチを設定し、地山面まで掘り下げる層位を観察した。一部にセクションベルトを残して層位を確認しながら、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構の掘削は埋土の堆積状況を観察するため半裁するか、セクションベルトを2～3本残して掘削し、土層の記録作業が終わり次第完掘した。排土は人力とベルトコンベアで調査区外へ搬出した。

遺構は検出後、1:100で概略図を作成して、遺構毎に通し番号をつけた。遺構の検出状況や土層、遺物の出土状況は調査員と調査補助員が手実測により1:20で図化した。各遺構の検出状況、土層断面、完掘状況などの記録写真、調査区のブロック写真、全体写真は調査員が撮影した。すべての遺構完掘終了後、ラジコンヘリコプターによる図化用の空中写真撮影を撮影した。あわせて俯瞰・斜め写真等を撮影した。一部、手実測による平面図作成を行った。

出土遺物は、現地作業と並行して、洗浄・バインダー処理・注記・仕分けの整理作業を行った。接合、復元は現場作業中止時や、現場終了後に行った。遺物実測やトレース等は基準を統一し、調査員と補助員で図版を作成した。写真や図版は年度・遺跡・地区毎にファイルにまとめ、出土遺物は報告書の写真図版のとおりに整理箱に収めた。またそれ以外の遺物は地区的遺構毎、グリッド毎にならべて整理箱に収めた。(片田)



第3図 院林遺跡3地区の調査区割 (1:2,000)

## 2 院林遺跡3地区の概要

### (1) 地形と基本層序 (第3・4図)

院林遺跡3地区は旅川と山田川にはさまれた河岸段丘上に立地し、標高56~58mを測る。院林遺跡の南東寄側に位置し、昨年度調査した1、2地区と隣接している。

基本層序は①耕作土、②近世以降の盛土、③遺物包含層、④地山である。田面から地山までは約70cmである。

### (2) 遺構の概要

#### SB01 (第8図、図版2)

調査区の西側、X 5~10、Y 5~11に位置する。南北方向3間、東西方向4間の総柱建物である。建物の東南端は調査区外となるため、柱穴の検出はできなかったが、床面積は推定で約68m<sup>2</sup>である。主軸は真北から3度西にふれる。柱穴の規模は大きさが約30~50cmの円形を呈し、深さは20~40cm、埋土は黒褐色シルトに地山土が混じる。出土遺物から、建物の時期は12世紀後半~13世紀前半頃と考えられる。

#### SB02 (第8図、図版2)

調査区の中央、X 5~8、Y 16~20付近に位置する。南北方向2間、東西方向2間の総柱建物である。床面積は約23m<sup>2</sup>である。主軸は真北から7度西にふれる。柱穴の平面は直径約25cm前後の円形を呈し、深さは約30cm前後である。削平を受けており、柱穴の遺存状況は良くない。埋土は黒色粘質土に地山土が混じる。

#### SK01 (第9図、図版3)

調査区の南西端、X 3、Y 5付近に位置する。南北方向約1.2m、東西方向約0.8mの楕円形の土坑である。深さは約25cmであり、壁面は緩やかに立ち上がる。中世土師器皿11点が出土しており、12世紀~13世紀頃のものである。

#### SK06 (第9図、図版3)

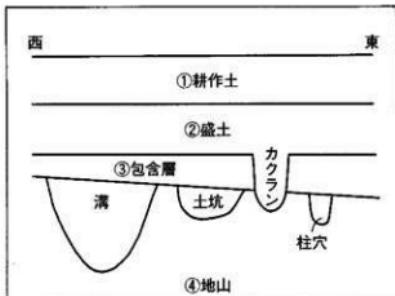
調査区の南側、X 5、Y 11付近に位置する。北側を暗渠に切られ、南側は調査区外に延びているため遺構の全容は定かではないが、南北2m以上の隅丸三角形の土坑である。深さは約35cmであり、断面はほぼ垂直に立ち上がる。土坑の北端から漆器椀と椀の中に中世土師器皿が伏せた状態で出土した。漆器椀と中世土師器皿の内部には朱が付着していた。また土坑の中央部でも、中世土師器皿1枚が完形で出土しており、祭祀行為の可能性をうかがわせる。

#### P91 (第7・9図、図版2)

調査区南西端、X 4、Y 6付近に位置し、掘立柱建物と思われるSB03を構成する柱穴である。平面形は直径約50cmの円形を呈し、埋土は黒褐色土を中心に3層に分けられる。柱穴の中央部、柱痕と思われる層とその下層から中世土師器皿が4枚出土している。うち3枚は完形で法量もほぼ同じであった。上から順に1枚目は柱穴の中央付近に正位置に、2枚目は1枚目の下方に大型の皿破片と一緒に立った状態で、3枚目は柱穴の底部から立った状態で出土している。

#### SD01 (第10図、図版4)

調査区の北西端から南東端にかけて、調査区を対角線に流れる河道である。幅は3~4m、深さは約110cm、断面形状は平坦な底面から階段状に立ち上がり、検出面ではほぼ垂直に掘り込んでいる。特に上層の黒褐色土から磨耗した土器の細片が多く出土している。中層から下層にかけては黒色の粘土にグライ化した地山粘質土が混じり、灌水している。最下層には植物遺体が堆積している。出土遺物から、15世紀頃には埋没していたと考えられる。



第4図 院林遺跡3地区の基本層序

#### SD02、04（第10図、図版4）

SD02は調査区の南西端付近を流れるが、削平が著しく始点終点がはっきりしない。検出長は約2m、深さ10cmである。埋土は黒褐色土に地山土が混じる。SD04は調査区の西寄りに位置する。検出長は2m、深さは約10cm、埋土は黒色土である。

#### SD05、06、07（第10図、図版4）

調査区北から東にかけて、並行して流れる3条の溝である。SD05は幅約2m、深さは約30cmであり、埋土は地山に黒褐色土がわずかに混じる。断面は緩やかに立ち上がる。SD06は05よりも2m北を流れており、幅約1.5m、深さは約50cm、断面形は逆台形、埋土は黒褐色土を中心には5層に分けられる。X9、Y32付近が溝の終点であり、この地点から完形の土師器皿が2枚出土した。SD07はSD06の1m北を流れ、幅は約60cm、埋土は黒色土に地山土が混じる。断面形は東側では袋状、西側では緩いすり鉢状を呈す。

### （3）遺物の概要

#### SB01（第17図、図版11）

1は中世土師器・皿である。非ロクロ成形で、口縁部は1段ナデを施す。底部と口縁部の境は不明瞭である。12世紀～13世紀頃と考えられる。

#### SK01（第17図、図版11）

2～12は中世土師器・皿である。2～11は非ロクロ成形、12はロクロ成形である。口径8～10cmと、13～15cmのものに分けられ、概ね、12世紀後半～13世紀代と考えられる。

#### SK03（第17図、図版11）

13、14は中世土師器・皿である。12世紀後半～13世紀頃と考えられる。

#### SK06（第17図、図版11）

15、16は中世土師器・皿である。15はロクロ成形であり、底部に糸切り痕が見られる。16の内部には赤色顔料が付着している。成分分析の結果、水銀朱であることを確認している。図示できなかったが、漆器柄が出土している。漆器柄の中に伏せた状態で16の中世土師器皿が入っていた。内外面ともに黒塗で文様はなく、内面に水銀朱が付着していた。12～13世紀のものと考えられる。

#### SD01（第17・18図、図版11・12）

17、19は須恵器・杯、8は須恵器・蓋である。23、24は須恵器・壺の体部破片である。21はロクロ成形の土師器・碗であり、底部に糸切り痕が残る。22～34は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。磨耗が激しい。35、37は珠洲・すり鉢である。38は珠洲・壺の底部である。36、37、40は珠洲・壺の体部である。41、42は青磁・碗である。41は体部外面に連弁文を施す。

#### SD05（第18図、図版12）

43は須恵器・蓋である。44は中世土師器・皿である。45、46、48～51は土師器・碗である。45、46はロクロ成形である。47はふいごの羽門である。52は中世土師器・鉢である。

#### SD06（第18図、図版12）

53は須恵器・杯Bである。54・55は、中世土師器・皿である。56・57は須恵器・壺の体部破片である。

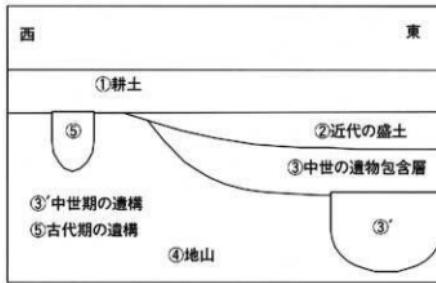
#### P・包含層出土遺物（第19図、図版12）

58は、P66出土の中世土師器・皿である。59はP142出土の中世土師器・皿である。60～63はP91出土の中世土師器・皿である。64はP176出土の中世土師器・皿である。65は打製石斧である。66は須恵器・杯、67は壺の底部である。68は土鍾である。69～75は土師器・皿である。71には漆が付着している。76は越中瀬戸・皿である。底部外面上に「×」の墨書きがある。77～79、82は珠洲・すり鉢である。80、81は古銭である。80は「寛永通寶」、81は北宋錢で「治平元寶」である。初鋤年は1064年である。83、84は珠洲・壺である。（片田）

### 3 寺家廃寺跡1地区の概要

#### (1) 地形と基本層序 (第5・6図)

本調査区は、旅川右岸、遺跡の中央部に位置する。東から西、旅川に向けて緩やかに傾斜する。標高は、約56.50~57.50mを測る。基本層序は、①耕作土、②灰褐色粘質土（近代盛土）、③黒褐色粘質土（中世の遺物包含層）、④黄褐色粘土（地山）である。以前のは場整備等で削平された箇所が多く（Y35列から西側において顕著）、②、③層がなく、耕作土直下に地山を確認する箇所も多い。



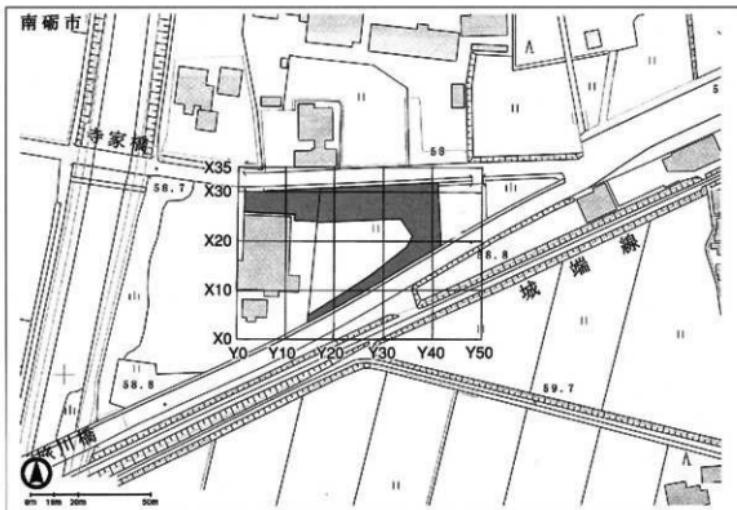
第5図 寺家廃寺跡1地区の基本層序

#### (2) 遺構の概要 (第11~16図、図版5~8)

本地区では、古代の土坑2、中世の土坑20、溝20、ピット等を確認した。中世が主体であることから、中世の遺構について先に記述する。

#### SD01 (第11・16図、図版5・8)

調査区の東側、X16~31、Y34~42に位置する。調査区全体の三分の一を占める。東西幅12m以上、深さは1.2mを測る。真北に対して、17°西にふれる。東側の溝の方は調査区外である。流れは、調査区外の南から北に向かっている。埋土は上から順に、黒褐色粘土、青灰色粘土、青灰黑色粘土で堆積している。西側の掘り方付近の埋土の状況から、一度埋め戻し、再度使用したことがわかる。出土遺物には、古代期では須恵器・杯、杯蓋、甕、土師器・椀、皿、中世では中世土師器・椀、皿、白磁・碗、皿、青白磁・合子がある。これら



第6図 寺家廃寺跡1地区の調査区割 (1:2,000)

の遺物から、溝の時期は12世紀前半から13世紀初頭に存在したと考えられる。溝の掘り方西側、調査区の中央部分において遺物が集中して出土している。特に、完形の土師器・椀、皿が多く、何らかの祭祀儀礼を行っていた可能性がある。

#### SD02・03・04（第11・16図、図版9）

調査区の北側、X28~31、Y3~34に位置する。3本の溝が調査区とほぼ平行に東西に走る。SD02は幅約3m、深さ約40cmで、高低差から、西から東へ流れSD01に合流していたと考えられる。その南側に幅約50cm、深さ約30cmのSD03、SD04が存在する。埋土から、SD03がSD04を切っていることがわかる。埋土は、黒褐色土、黒褐色粘質土が主である。SD03は途中で南側に折れた後西に伸び、直角に屈曲する。SD02の北側には造構がなく、南側に土坑等が集中していることから、集落の区画をしていた溝で、土坑などの造構は集落の端にあたるのではないかと考えられる。出土遺物には、古代土師器・甕、須恵器・杯壺、壺、甕、中世土師器・皿、青磁・碗、珠洲・すり鉢、瀬戸美濃・天目茶碗、石臼、石鉢がある。これらから、SD02は12世紀後半、SD03・04は14世紀代に属する。

#### SK01（第13図、図版6）

調査区の中央部、X25~28、Y32~34に位置する。南北約5.2m、東西約4.0m、深さ約0.9~1.2mを測る。平面形は、南北に長い楕円形を呈する。底面中央部に楕円形の掘り込みがある。掘り方の南側から中央部にかけて、10~40cm大の石が確認できる。黒く変色した石が多く、被熱が確認できる。埋土は黒褐色の粘質土が主で、底面近くの層からは植物遺体を確認している。造構掘り方の西側において、SD11の延長と交わる。高低差から考慮して、SK01はSD11から水を導入し、池として機能していたと考えられる。出土遺物には、古代土師器、須恵器のほか、中世土師器、珠洲、青磁、茶入れ（瀬戸）、朱描の文様を施した漆器椀、人形であろう薄い木片等がある。これらから、造構は14世紀前半にあたる。

#### SK02~10（第12・13図、図版6・7）

調査区の中央部東寄り、X24~27、Y28~34に位置する。9基の堅穴状土坑を切りあつた状態で確認した。土坑の多くは方形で、一辺が2~3mで深さは20~40cmを測る。壁面の立ち上がりはやや緩やかで、底面はやや丸みを帯びるもの、平坦なものに分かれる。SK02は、SD10、SD11に切られている。SK06はSK07を切っている。SK09は、SK08、SK10に切られている。SK05は、SK01の南側に接して位置する。埋土は黒褐色土が主だが、SK09は炭を大量に含む。SK02からは珠洲・すり鉢の口縁部破片、SK03からは珠洲・壺の底部、SK04からは珠洲・すり鉢、中世土師器・皿、越前・甕の口縁部が出土している。また、SK05では青磁・碗、SK06では珠洲・甕の口縁部、SK09では土師器・青磁・碗、SK10では中世土師器・皿が出土している。大半は、使用していた土器などを廃棄した穴と考えられる。出土遺物から、いずれも14世紀代に属する。

#### SK11（第14図、図版9）

調査区の中央部西寄り、X25~27、Y18~20に位置する。平面形は一辺約5mの方形を呈する。深さは、40~50cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。埋土は黒褐色粘質土が主で、地山上が大量に混じる。造構内の西側には、1辺20cm大の石が南北に列を成しており、造構の中央には、10~20cm大の石が不規則に敷かれている。出土遺物には、珠洲・すり鉢、甕、越前・甕、青磁・碗、瀬戸美濃・皿、越中瀬戸・皿、五輪塔（火輪）がある。五輪塔は、造構内南側のピット内から出土している。これらの遺物から、造構は14世紀後半に属する。

#### SK14~16（第11図、図版10）

調査区の西寄り、X24~27、Y5~9に位置する。SK15の平面形は円形であり、SK14、SK16はそれぞれ造構が調査区外に伸びており、全容は不明である。埋土は黒褐色粘土が主である。底面は平坦で、壁の立ち

上がりはほぼ垂直である。遺構の上面は後世の攪乱を受けている。出土遺物は、SK14に珠洲・壺の口縁部があり、吉岡編年のI期にあたるが、混入の可能性があり遺構の時期は断定できない。

#### SD10・11（第11図、図版10）

調査区の中央部東寄り、X25~28、Y30~32に位置する。幅約30cm、深さ約15cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。北側でSD04に切られ、南東でSK01と接する。埋土は、黒褐色土である。埋土の状況、SD04に切られている点から、SD02と同時期に存在し、SK01へ水を導入していたものと考えられる。出土遺物は無い。

#### SI01・02（第15図、図版8）

調査区の南隅、X8~11、Y22~25に位置する。SI01の掘り方は不定形で、一辺が約3m、深さは約20cm、SI02は方形で、一辺が約2m、深さは同じく約20cmを測る。いずれも底面は平坦で、壁面の立ち上がりはやや急である。埋土は、黒色土または黒褐色土であり、遺構の上面は後世に削平された可能性がある。堅穴住居と考えられるが、支柱の跡やカマドがないため断定できない。出土遺物には、古代土師器・碗、壺、須恵器・杯があり、これらから8世紀中頃の遺構と考えられる。

### （3）遺物の概要（第20~25図、図版13~20）

須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、越前、越中瀬戸、石製品（石臼）が整理箱で60箱出土した。遺物の帰属時期について、中世土師器皿、青磁、白磁等は分類を含めて富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所刊行1996年『梅原胡麻堂遺跡（遺物編）』を、珠洲は吉岡康暢氏の編年（1994『中世須恵器の研究』）を基にした。以下、図化したものについて記述する。

#### SD01（第20・21図、図版13~15）

1~24は中世土師器・皿である。出土数ではロクロ成形が非ロクロ成形を上回る。成形分類によるところでは、ロクロ成形のうち柱状高台を持ち、口径が15cm前後と大型のRA I類（1・2・4）、高台がなく体部が直線的もしくは内湾気味に開く、口径13~15cmのRB類（3・5）、同形態で口径10cm以下のRB小類（12~16）、口縁が短く直線的に開くRC類（11）、丸く立ち上がるRD類？（17）がある。非ロクロ成形では、明瞭な二段ナデを持つNA I類（18・21~23）、二段ナデが曖昧なNA II類（19・24）、幅広の一段ナデを持つNC I類（20）を確認している。代表的なものを図示したが、出土した個体数は多く、分類別個体数はRA I類：5.2、RB類：11.0、RB小類：15.1、RC類：1.9、RE類：2.0、NA I類：0.2、NA II類：0.5、NC類1.2、ND I類：3.1、ND II類：1.0となる。帰属時期には幅があり、12世紀初頭から13世紀初頭にかかる。

25は古代土師器・壺である。26~38は須恵器である。26~28は蓋、29、33は無高台の杯、30~32是有高台の杯である。34は壺の口縁部である。36は横瓶である。37、38は壺の頸部である。いずれも8世紀前半にあたる。39~43は白磁・碗である。いずれも12世紀前半にあたる。44、45は青磁・碗である。時期は白磁よりやや下り、12世紀後半となる。46は青磁・香炉である。47は青白磁・合子である。12世紀後半にあたる。48は越中瀬戸・すり鉢の体部破片である。49は珠洲・片口鉢の口縁部、50、51は珠洲・すり鉢である。吉岡編年のI期、12世紀前半にあたる。52はあいごの羽口である。

#### SD02（第22図、図版16・20）

53は土師器・壺である。54~56は須恵器・蓋、57は須恵器・壺の口縁部、58は杯、59は壺である。60~65は中世土師器・皿である。60・61はRB類で、12世紀中頃から13世紀初頭にあたる。62・64はRC類もしくはRD類にあたる。12世紀後半か。65はNH類の手づくね成形で、平坦な底面に垂直な口縁部を持つ、コースター型を呈している。12世紀中頃に比定出来る。66は白磁・碗、67、68は青磁・碗である。12世紀前半に帰属か。69、70は珠洲・すり鉢である。吉岡編年のII期にあたり、13世紀初頭になる。71、72は石臼の上臼

である。73は石鉢で、74は円盤状の台座である。74は平坦な上面に1cm幅でU字状の切りこみを施し、蓮弁を表現していると思われる。下面は斜めに削り出している。71~74はいずれも桑山石を成形している。

#### SD03・04・08・07・17 (第23図、図版15・17)

75~77は須恵器である。78、79は中世土師器・皿である。78はRD類、79はRA I類にあたる。13世紀後半に属する。80は白磁・皿である。81~83、86は珠洲である。81は壺の口縁部である。83は壺の体部破片である。86はすり鉢の口縁部、87は土師器・壺の底部である。84、85は青磁・碗である。88は瀬戸美濃・天目茶碗である。89は珠洲・片口鉢である。吉岡編年II期にあたる(以上SD04)。90 (SD03) は珠洲・すり鉢の底部である。91 (SD07) は石臼(下臼)である。石材はSD02出土の石臼同様、桑山石を使用している。92 (SD08) は中世土師器・皿である。ND II類で、ナデは一段である。93 (SD17) は瀬戸・皿の底部である。

#### SK01~06・09・10・11・14・24 (第23~25図、図版17・18)

94 (SK06) は珠洲・壺の口縁部である。吉岡編年IV期で、14世紀にあたる。95 (SK09) は土師器・椀の体部である。内外面に赤彩を施している。96 (SK09) は瀬戸・皿、97 (SK14) は須恵器・杯である。98 (SK10) は中世土師器皿である。ロクロ成形のRE類にあたり、小ぶりである。14世紀中頃である。

99~108はSK01出土遺物である。99~101は珠洲で、99はすり鉢の口縁部、100はすり鉢の底部、101は壺の口縁部である。いずれもIV期、14世紀前半にあたる。102、103は中世土師器・皿である。NC類で、13世紀中頃から14世紀初頭か。104、105は青磁・碗である。106は瀬戸・茶入れである。107、108は木製品である。107は人形、108は漆器椀である。材質は107がスギ、108がブナ類を用いる。108は内外面に松などの植物を描画する。109 (SK02) は珠洲・片口鉢、110 (SK06) は珠洲・すり鉢の底部である。109はV期、14世紀後半にあたる。111は中世土師器・皿、112は越前・壺の口縁部である。ともにSK04出土である。111はRE類、14世紀中頃か。113 (SK03) は須恵器・壺の底部、114・115 (SK05) は青磁・碗の底部である。

116~119は珠洲である。116はすり鉢の口縁部、117・118は底部である。119は壺の口縁部である。120は越前・壺の口縁部である。121は青磁・碗、122は瀬戸・皿、123は越中瀬戸・皿である(以上SK11)。

125 (SK11) は五輪塔・火輪である。126 (SK14) は珠洲・壺の口縁部である。127 (SK14) は瀬戸美濃・天目茶碗である。

#### SI01 (第25図、図版19)

128、129は土師器である。130~134は須恵器である。130は杯の口縁部、131は蓋のつまみ部、132は蓋の口縁部、133、134は杯の底部である。いずれも8世紀中頃にあたる。

#### その他の遺物 (第25図、図版19)

135は須恵器・壺の口縁部である。136、137は中世土師器・皿である。138は石製品である。一方に刃部を作り出している。(佐藤)

## IV まとめ

### 院林遺跡3地区

・今回調査した3地区は12~13世紀に帰属すると思われる掘立柱建物2棟、溝6条、土坑7基、柱穴を検出した。2棟の掘立柱建物と溝は、主軸はほぼ一致しており、出土遺物から見てもほぼ同時期に機能していたと思われる。SD01には区画溝としての役割もあったと思われる。出土遺物はほとんどが中世の遺物であり、須恵器がわずかながら出土している。

・土器を埋納した柱穴P91と土坑SK06を検出した。P91には柱痕があり、土器は埋土の中央部から下部に埋納されていた。掘立柱建物と思われるSB03は構成する柱穴であり、建物の廃絶に伴う祭祀であると考えられる。またSB01の東側3mにはSK06がある。上坑の北端には朱が入った漆器椀と、漆器椀の中に土師器皿が伏せた状態で埋納されていた。また土坑の中央部に上師器皿が正位置で出土している。朱には古くから高貴なもの、あるいは魔よけなどのまじないの意味があり、朱を入れた容器を埋納することで祭祀を行っていると考えられるが、建物に関連しているかどうかは不明である。

・昨年度調査同様に、ふいごの羽口などが出土しており、集落内に鍛冶工房があった可能性がうかがえる。また、院林氏に直接関連のある遺物や遺構は確認できていないが、院林地区での中世集落の営みには、文献にも見られる院林氏の盛衰と関係があると考えられる。(片田)

### 寺家庵寺跡1地区

・今回の調査区では、12世紀代の大溝(SD01)、区画溝(SK02)、14世紀代の大型土坑(SK01)、竪穴状土坑群(SK02~SK11)、その他ビット等を確認した。隣接地に南砺市指定文化財の皇孫塚(礎石)が所在することから、古代期の寺跡の検出を想定していたが、五輪塔が出土したSK11の他は寺院に関連する遺構がなかった。SK11は14世紀後半に属する遺構であり、古代の寺院に関する遺構、遺物は、この調査区では見いだせなかつた。

・大溝(SD01)にはほぼ完形品の中世土師器の椀、皿などが大量に廃棄されている点について、何らかの祭祀儀礼行為であったと考えられる。平成12年度に調査を実施した在房遺跡(福光地域)では、11世紀後半から12世紀前半に属する大量の中世土師器が出土した土坑があり、祭祀儀礼を行っていたと考えられる。今回出土した中世土師器群は、珠洲等の共伴遺物があるが、煮焚き具と合せて日常雑器をまとめて廃棄した様とは異なる。時期はやや異なるが、1997「土器祭祀類型試論」「北陸古代土器研究第7号」において、前田清彦氏が10・11世紀以降顕著となる土師器の大量廃棄行為について分類を試みているが、今回の大溝の例はこの中のF型にあたるのではないかと考えられる。集落全体に関する祭祀を、すでに存在していた大溝に土師器を大量に廃棄することで行ったものであろう。

・調査区内において、古代期の遺構を確認したのは南端でのSI01、SI02の2基だけであり、北側の遺構は大部分が中世に属する。古代の集落跡や寺院跡は、現在の県道砺波福光線以南に存在する可能性もある。(佐藤)

### 参考文献

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『梅原胡摩堂遺跡(遺物編)』

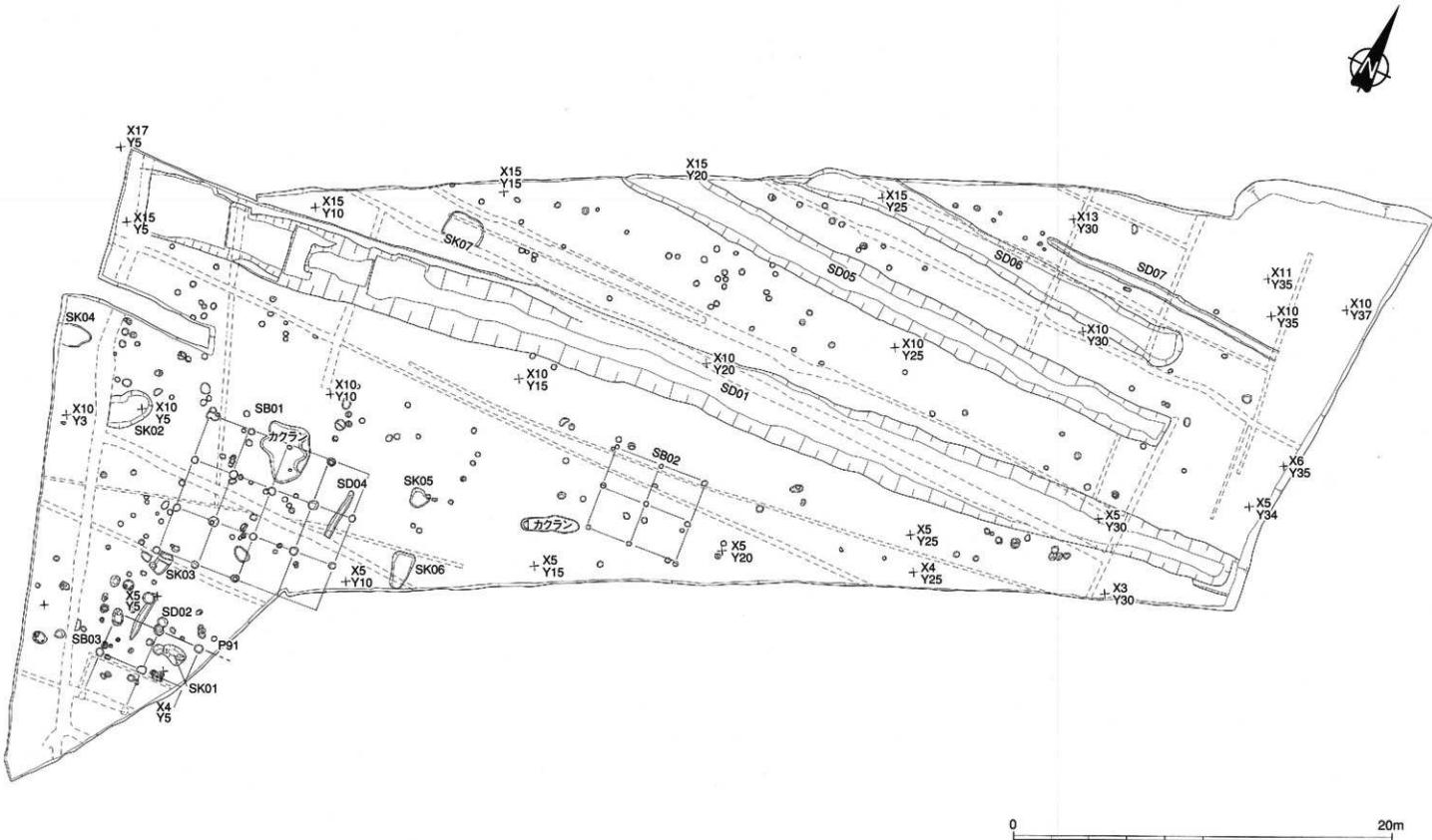
福野町史編纂委員会1991『福野町史 通史編』

福光町教育委員会2001『在房遺跡I』

前田清彦1997『土器祭祀類型試論』『北陸古代土器研究第7号』北陸古代土器研究会

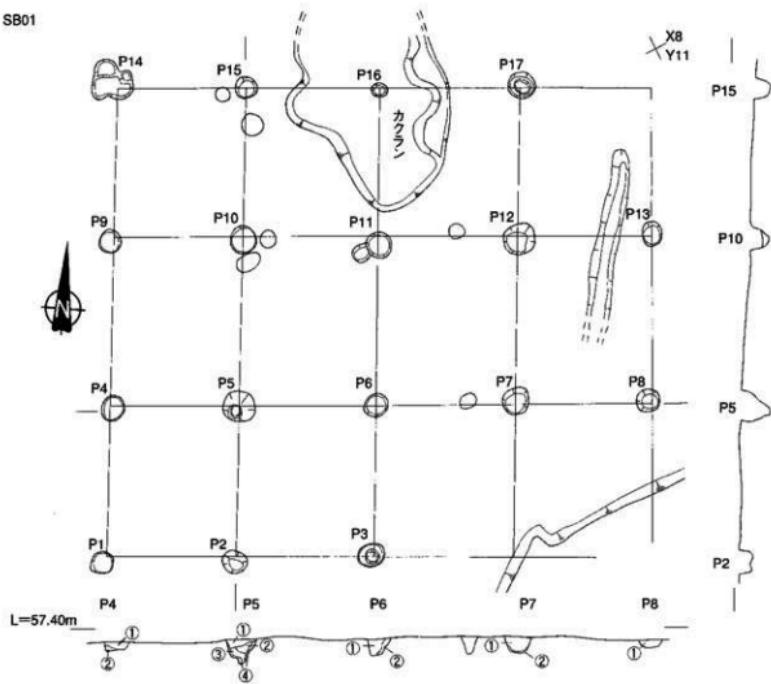
宮田進一1997『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸考古学が語る社会史』桂書房

吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』

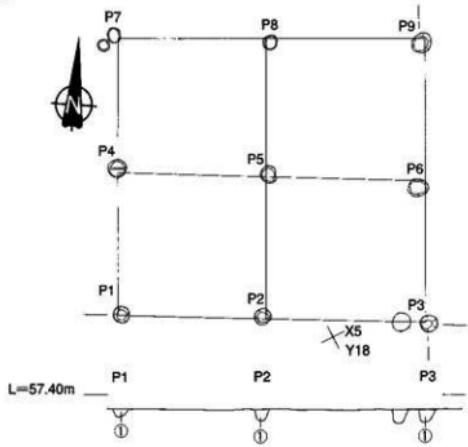


第7図 院林遺跡3地区平面図 (S=1:200)

SB01



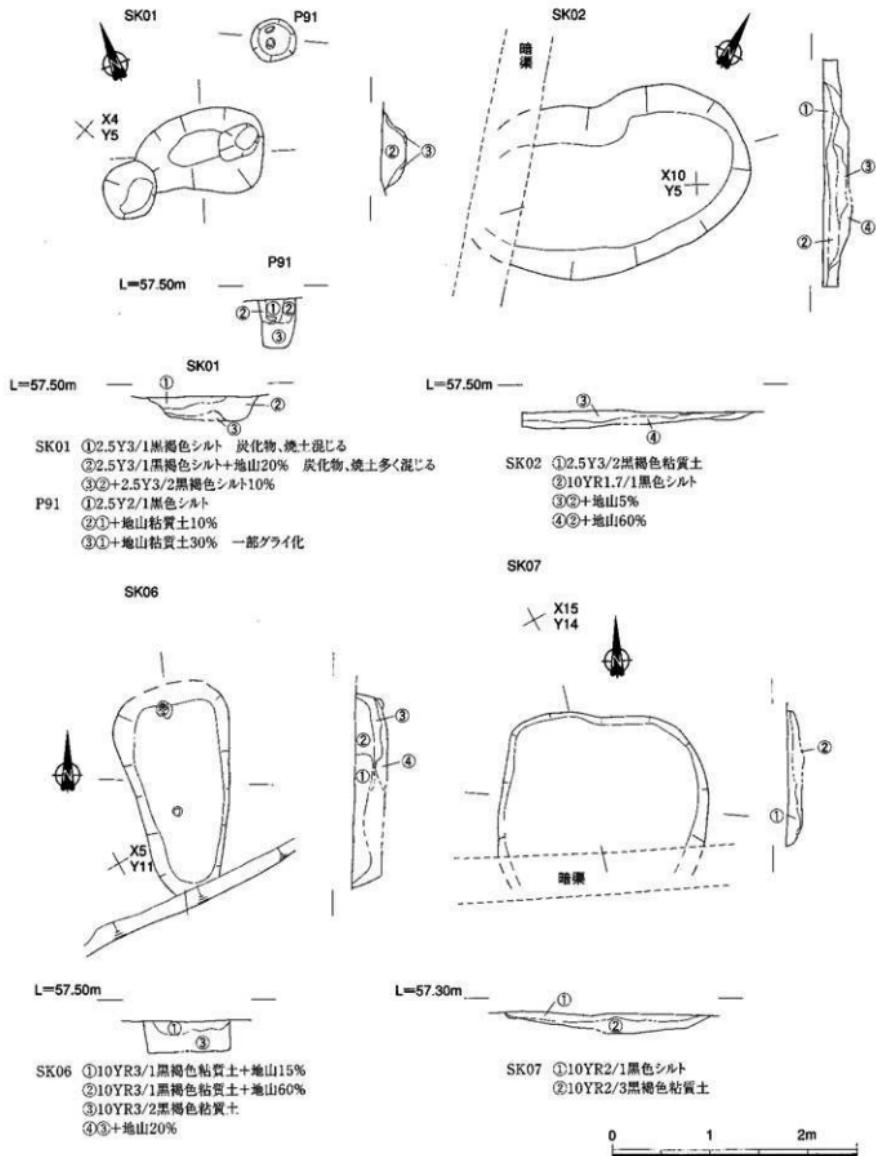
SB02



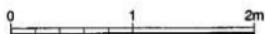
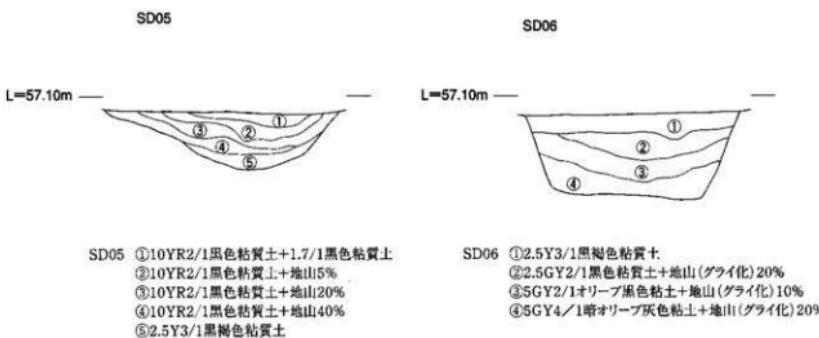
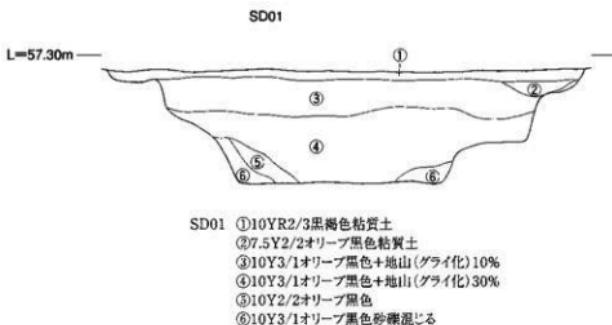
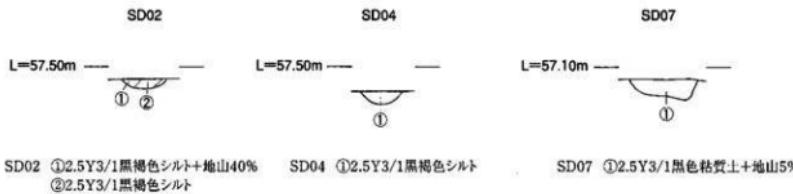
- SB01  
 P4 ①2.5Y3/1黒褐色粘質土+地山20%  
 ②2.5Y3/1黒褐色粘質土+地山30%  
 P5 ①2.5Y3/1黒褐色粘質土+地山15%  
 ②2.5Y2/1黑色シルト  
 ③④+地山20%  
 ④⑤+地山30%  
 P6 ①2.5Y3/1黒褐色粘質土+2/1黒色シルト5%+地山5%  
 ②2.5Y3/1黒褐色粘質土+地山15%  
 P7 ①2.5Y3/1黒褐色粘質土  
 ②③+地山  
 P8 ①2.5Y3/1黒褐色粘質土+地山15%
- SB02  
 P1 ①10YR2/1粘質土  
 P2 ①10YR2/1粘質土  
 P3 ①10YR2/1粘質土+地山40%

第8図 院林遺跡3地区の遺構(1) (S=1:80)



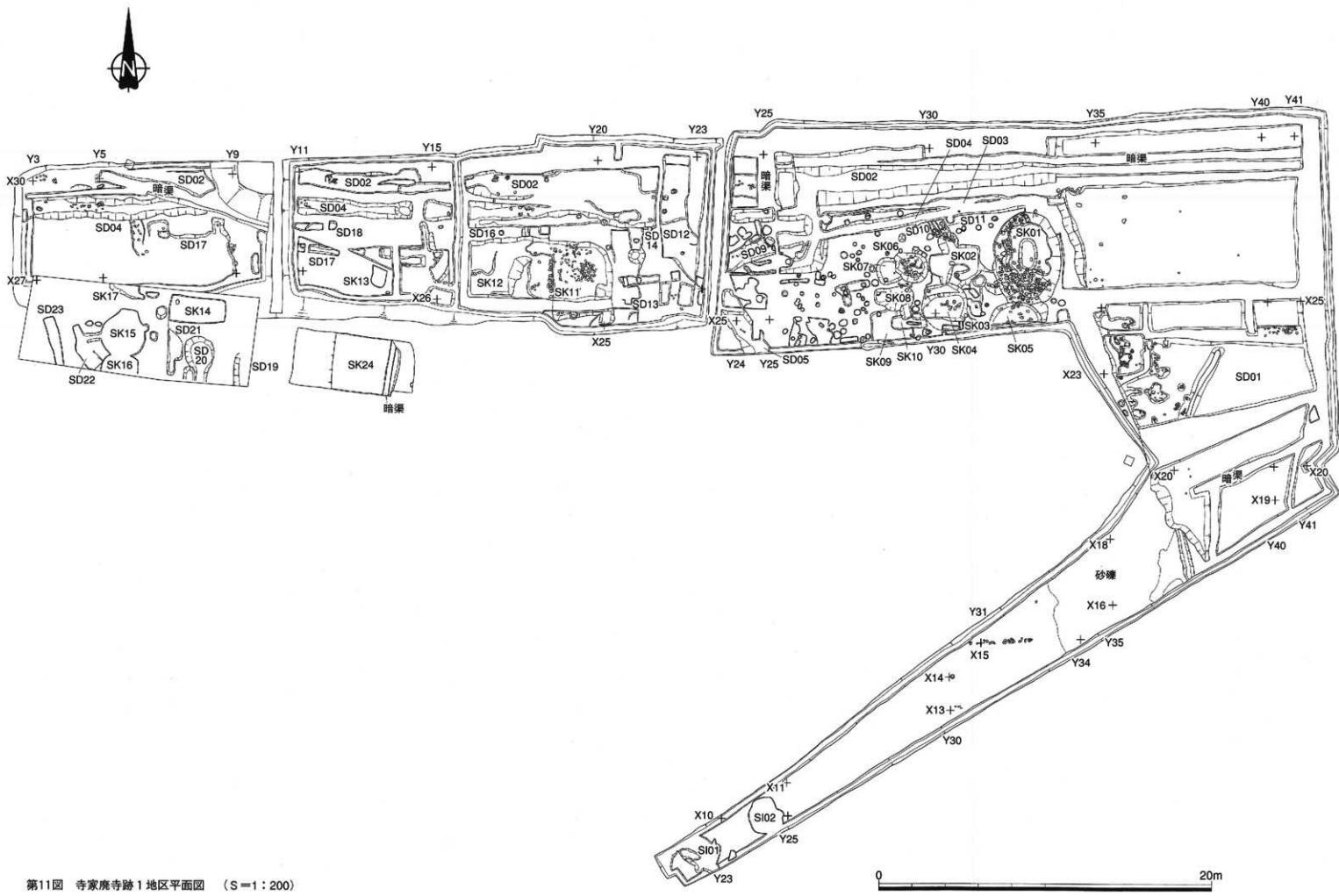


第9図 院林遺跡3地区の遺構(2) (S=1:50)

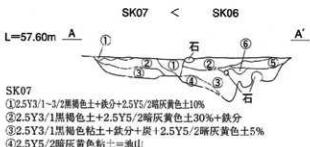
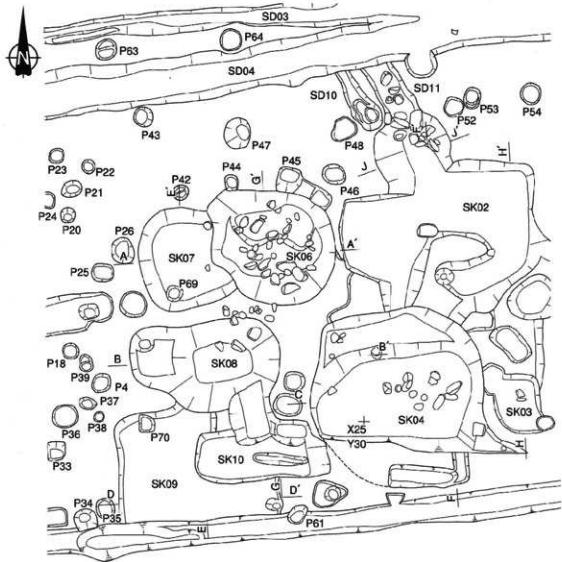


第10図 院林遺跡3地区の遺構(3) (S=1:40)

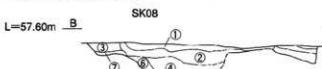




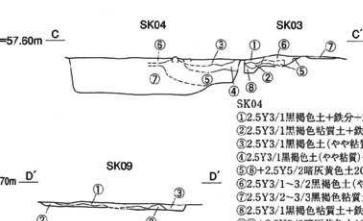
第11図 寺家廃寺跡1地区平面図 (S=1:200)



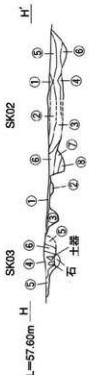
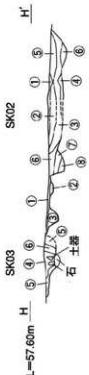
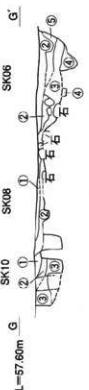
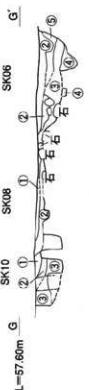
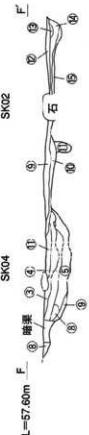
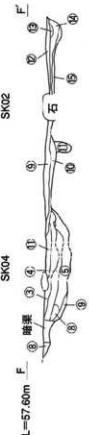
①2.5Y3/1-3/2黑褐色土+铁分+2.5Y5/2暗灰黄色土10%  
 ②2.5Y3/1黑褐色土+2.5Y5/2暗灰黄色土30%+铁分  
 ③2.5Y3/1黑褐色粘土+铁分+炭+2.5Y5/2暗灰黄色土5%  
 ④2.5Y5/2暗灰黄色粘土+油山



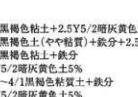
SK08 ①2.5Y3/1黑褐色土(やや粘質)+鉄分+炭	⑤2.5Y3/1黒褐色粘土
②2.5Y3/1黒褐色粘質土+鉄分	⑥③+⑦10%
③2.5Y3/2褐色土(やや粘質)+鉄分+炭	⑦2.5Y5/2暗灰黄色砂質土=地山
④②+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土5%	



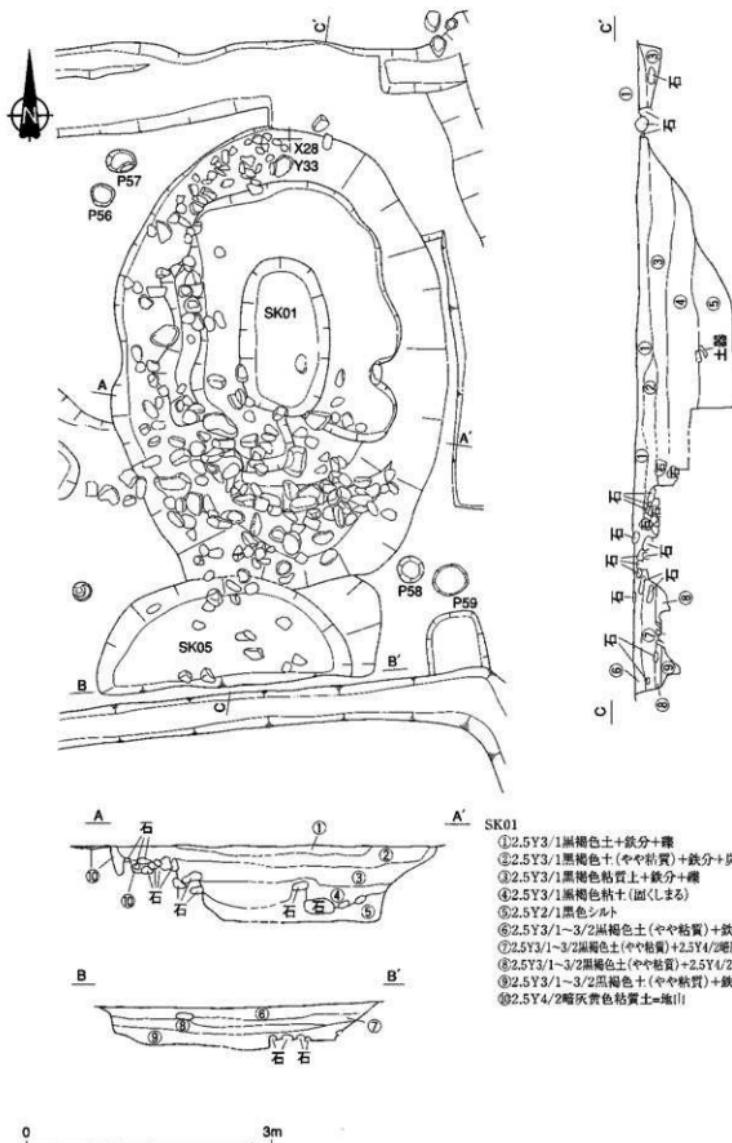
SK09 ①2.5Y3/1黒褐色土(やや粘質) + 鉄分  
②2.5Y3/1黒褐色土(やや粘質) + 2.5Y4/2暗灰黄色土 20%  
③2.5Y3/1黒褐色土(やや粘質) + 岩大量混  
④2.5Y3/1黒褐色土(やや粘質) + 黑褐色土 10%



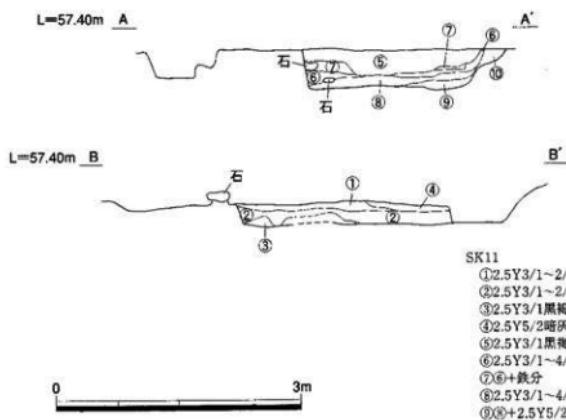
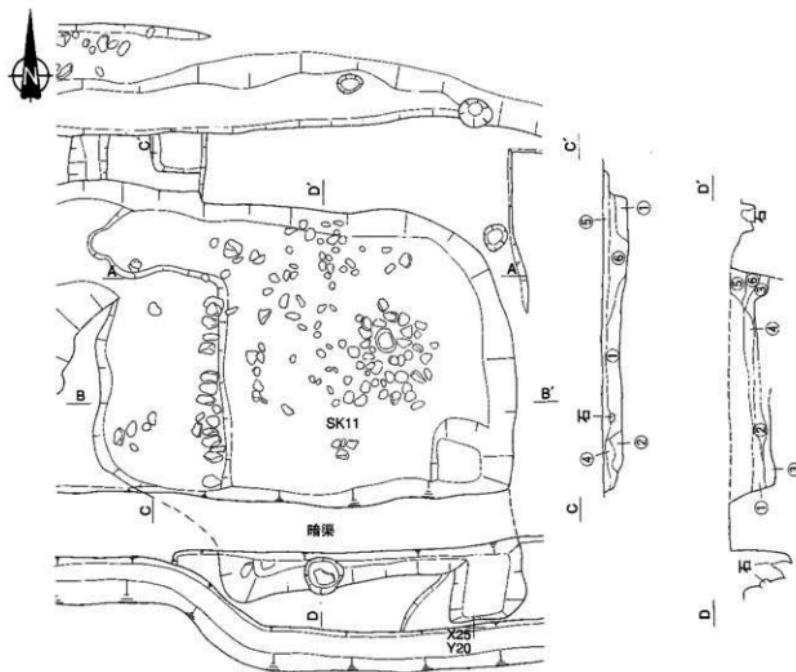
1 SK10  
  
 ~2/1 黑褐色土(やや粘質)+鉄分  
 ~5/2 密灰土=地山



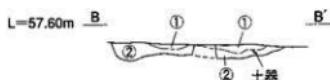
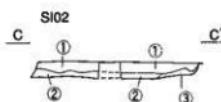
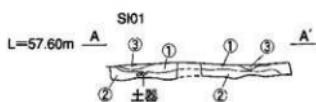
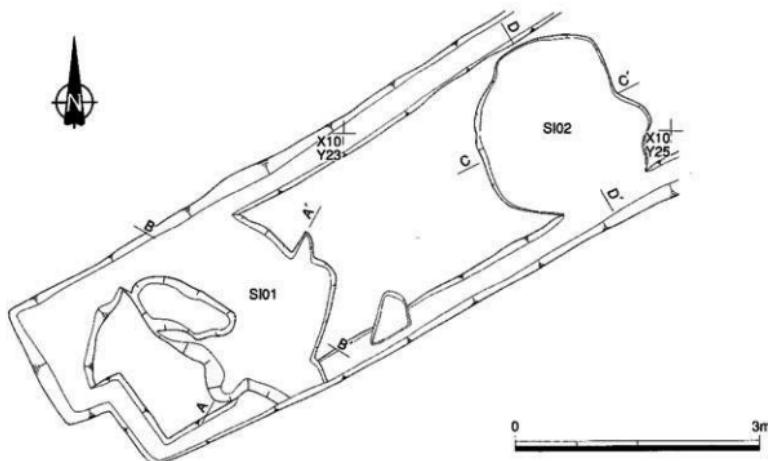
第12図 寺家廃寺跡1地区の遺構（1）（S=1:60）



第13図 寺家廃寺跡1地区の遺構 (2) (S=1:60)



第14図 寺家廐寺跡1地区の遺構（3）（S=1:60）



#### SI01

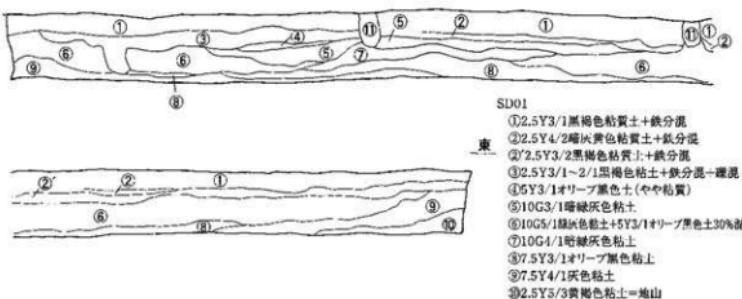
- ① 2.5Y2/1褐色土(やや粘質)+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土20%混
- ② 2.5Y2/1黑色粘土+鉄分
- ③ 2.5Y2/1黑色土(やや粘質)+鉄分
- ④ 2.5Y5/1黄灰色粘質土=地山

#### SI02

- ⑤ 2.5Y3/1黑褐色粘質土+鉄分+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土30%
- ⑥ 2.5Y3/2黑褐色粘質土+鉄分+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土20%
- ⑦ 2.5Y2/1~3/1黑色粘質土+鉄分
- ⑧ 2.5Y5/2~5/1黄灰色粘質土=地山
- ⑨ 2.5Y3/2黑褐色粘土+鉄分
- ⑩ 2.5Y4/1暗灰黄色粘質土+鉄分

第15図 寺家廐寺跡1地区の遺構 (4) (S=1:60)

L=57.40m 西 SD01



L=57.60m 南 SD04 SD03

SD02B

北 L=57.60m 南

SD04 SD03

SD02B - 03 - 04

- ① 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分+2~3cm大小石少量
- ② 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分多く含む
- ③ 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分+地山10%
- ④ 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分+炭
- ⑤ 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分多く含む
- ⑥ 2.5Y3/1 黒褐色粘土(やや粘質)+輕混
- ⑦ 2.5Y3/2 黒褐色土(やや粘質)+鉄分
- ⑧ 2.5Y3/2 黒褐色土(やや粘質)+2.5Y5/2 増灰黄色土10%+鉄分
- ⑨ 2.5Y3/1 黒褐色土(やや粘質)+2.5Y5/2 増灰黄色土10%+鉄分

SD04 - 03C

- ① 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分
- ② 2.5Y4/2 増灰黑色土=地山
- ③ 2.5Y3/1 黒褐色+2.5Y5/2 増灰黄色土10%+鉄分+炭
- ④ 2.5Y5/2 増灰黄色土20%
- ⑤ 2.5Y3/2 黒褐色粘土+2.5Y5/2 増灰黄色土30%

L=57.40m 南 SD02

北 L=57.60m 西 SD05

SD05 東

SD02

- ① 2.5Y3/1 黒褐色土(やや粘質)+鉄分
- ② 2.5Y3/1-4/1 黒褐色土+鉄分+炭
- ③ 2.5Y3/1-4/1 黒褐色土+礫混
- ④ 2.5Y3/1-4/1 黒褐色土(やや粘質)+鉄混
- ⑤
- ⑥ 2.5Y3/1-4/1 黒褐色粘土+鉄分+炭
- ⑦ 2.5Y3/1-4/1 黒褐色粘土+鉄分
- ⑧ 2.5Y3/1 黑褐色粘土+鉄分
- ⑨ 2.5Y5/2 増灰黄色土10%
- ⑩ 2.5Y5/1-5/2 増灰黄色土=地山
- ⑪ 2.5Y3/1-4/1 黑褐色粘土+鉄分+10%+鉄分

SD05

- ① 2.5Y3/1 黒褐色土+鉄分少く含む-2.5Y5/2 増灰黄色土5%
- ② 2.5Y3/1 黒褐色土+鉄分
- ③ 2.5Y3/1 黒褐色粘土+鉄分少+炭少
- ④ 2.5Y3/1 黑褐色粘土+鉄分+2.5Y5/2 増灰黄色土30%
- ⑤ 2.5Y4/2 増灰黄色粘土+鉄分

L=57.60m 南 SD09E

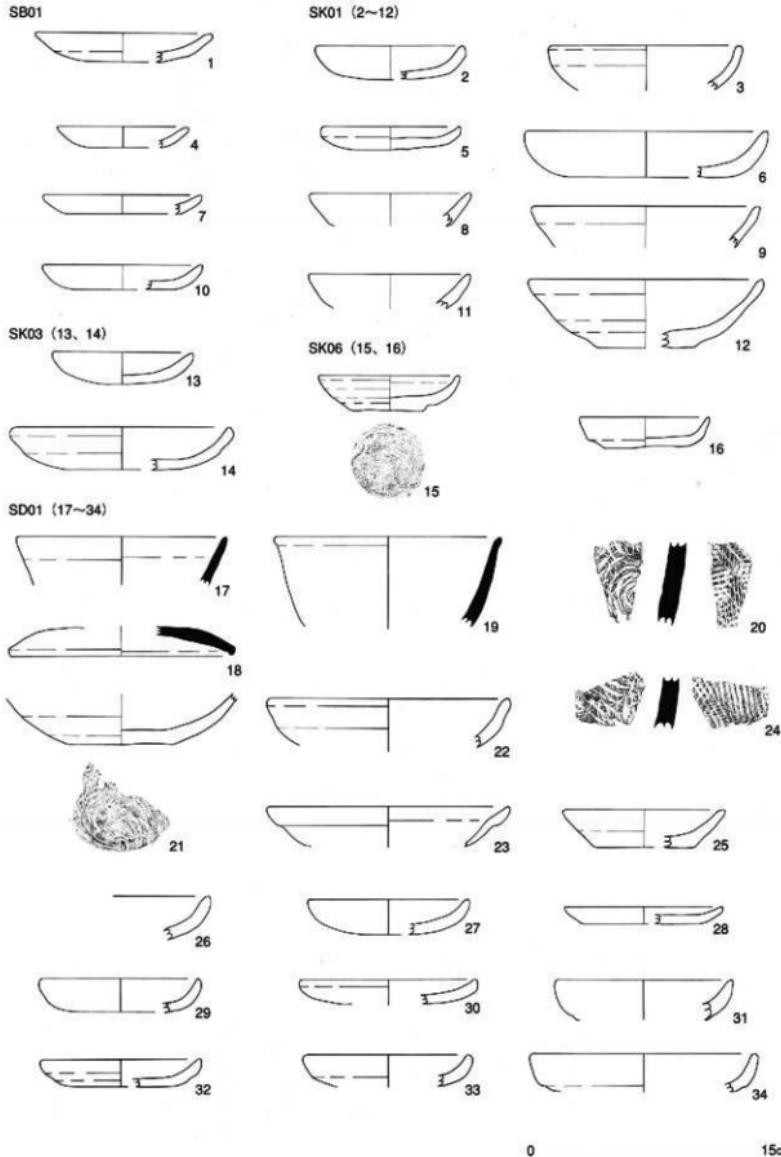
北

L=57.60m 南

SD09F

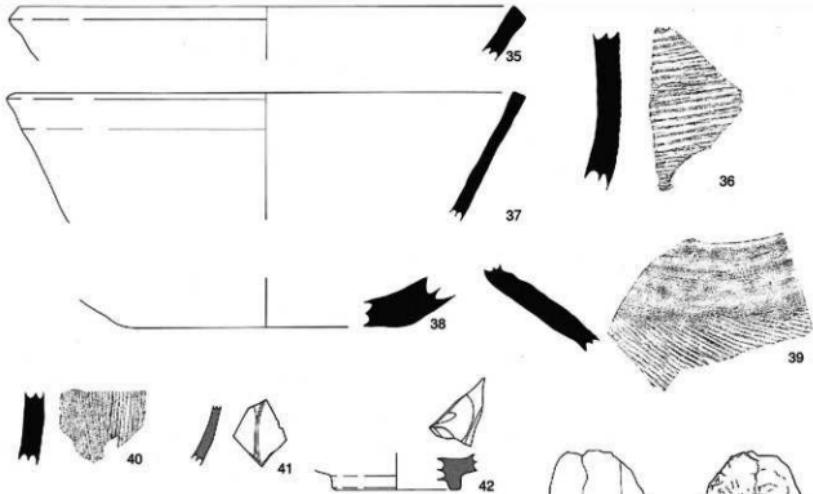
- ① 2.5Y3/1 黒褐色土
- ② 2.5Y3/1 黒褐色土(やや粘質)+鉄分
- ③ 2.5Y3/1 黑褐色粘土+鉄分
- ④ 2.5Y4/2 増灰黄色粘土+鉄分
- ⑤ 2.5Y3/1-3/2 黒褐色土+鉄分
- ⑥ ⑦+炭
- ⑦ 2.5Y3/1-3/2 黑褐色粘土+鉄分

第16図 寺家廐寺跡1地区の遺構(5) (S=1:60)

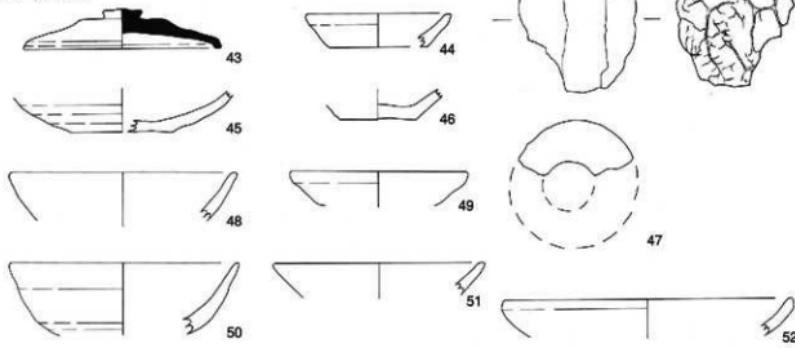


第17図 菩林遺跡3地区の遺物 (1) (S=1:3)

SD01 (35~42)



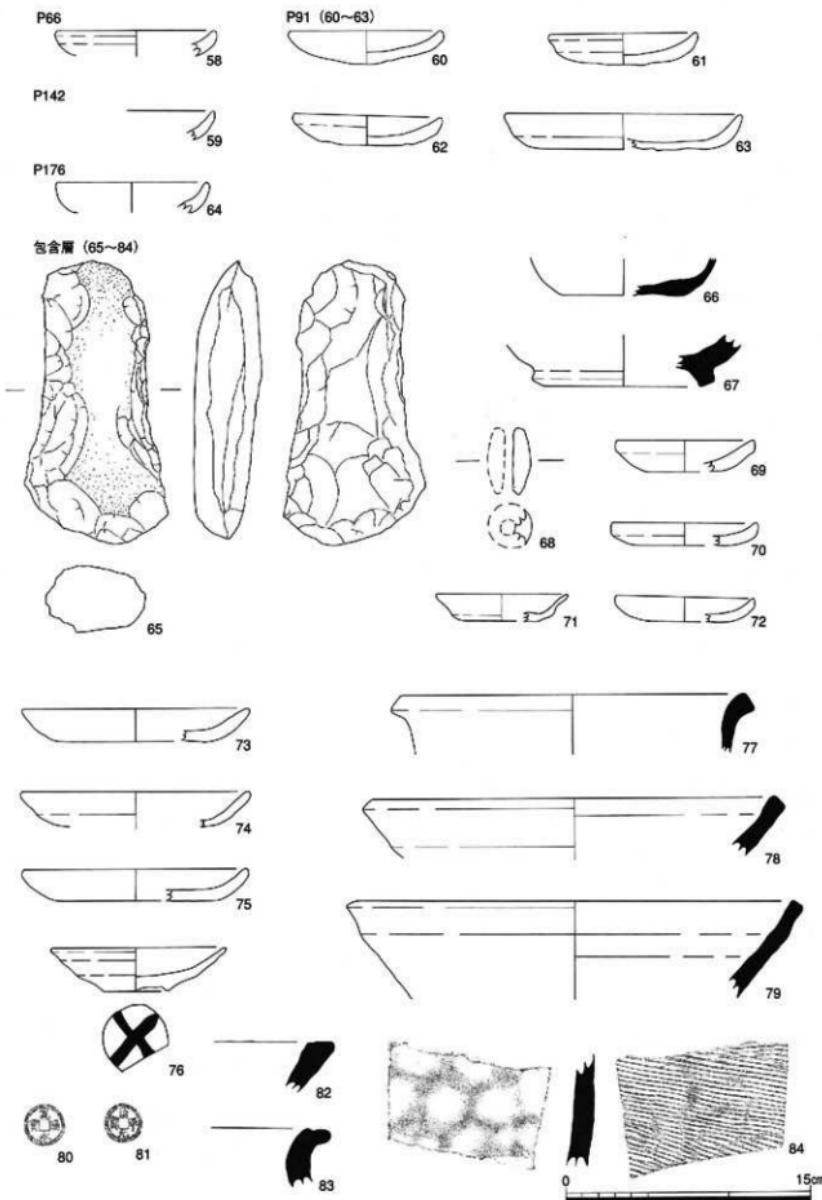
SD05 (43~52)



SD06 (53~57)

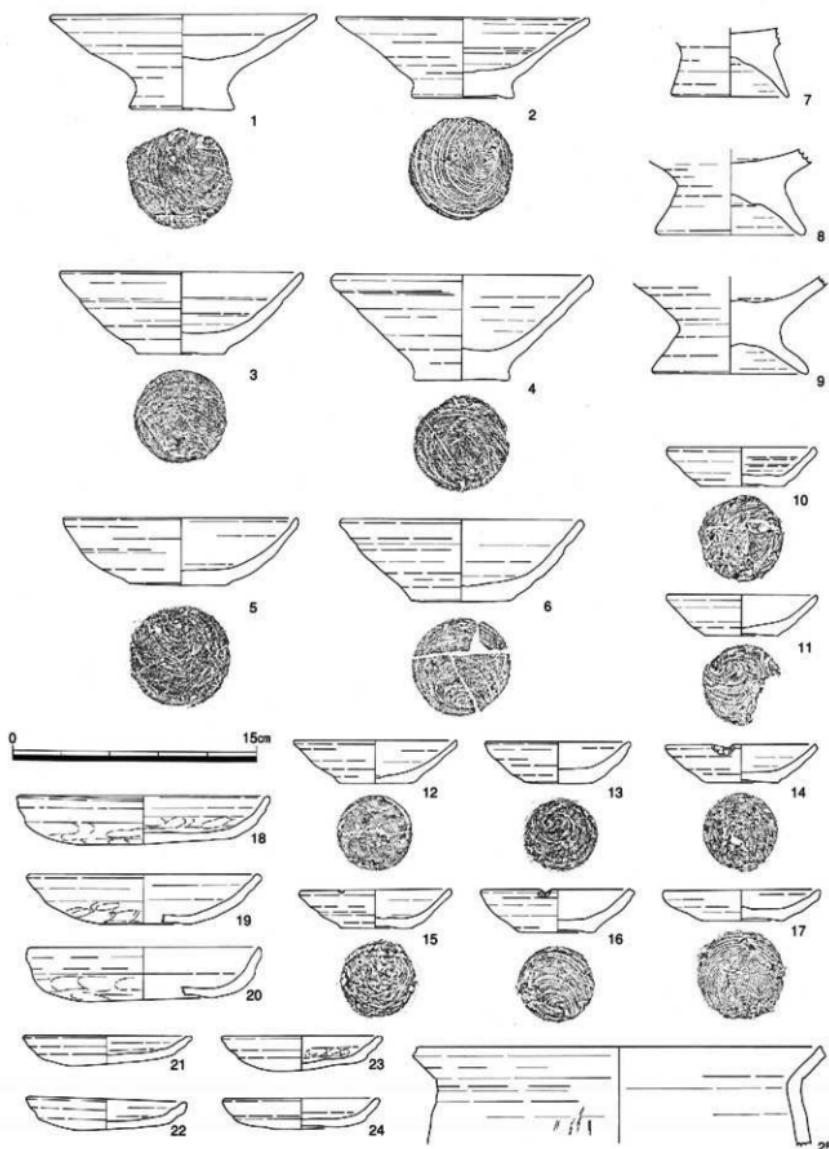


第18図 駄林遺跡3地区の遺物 (2) (S=1:3)



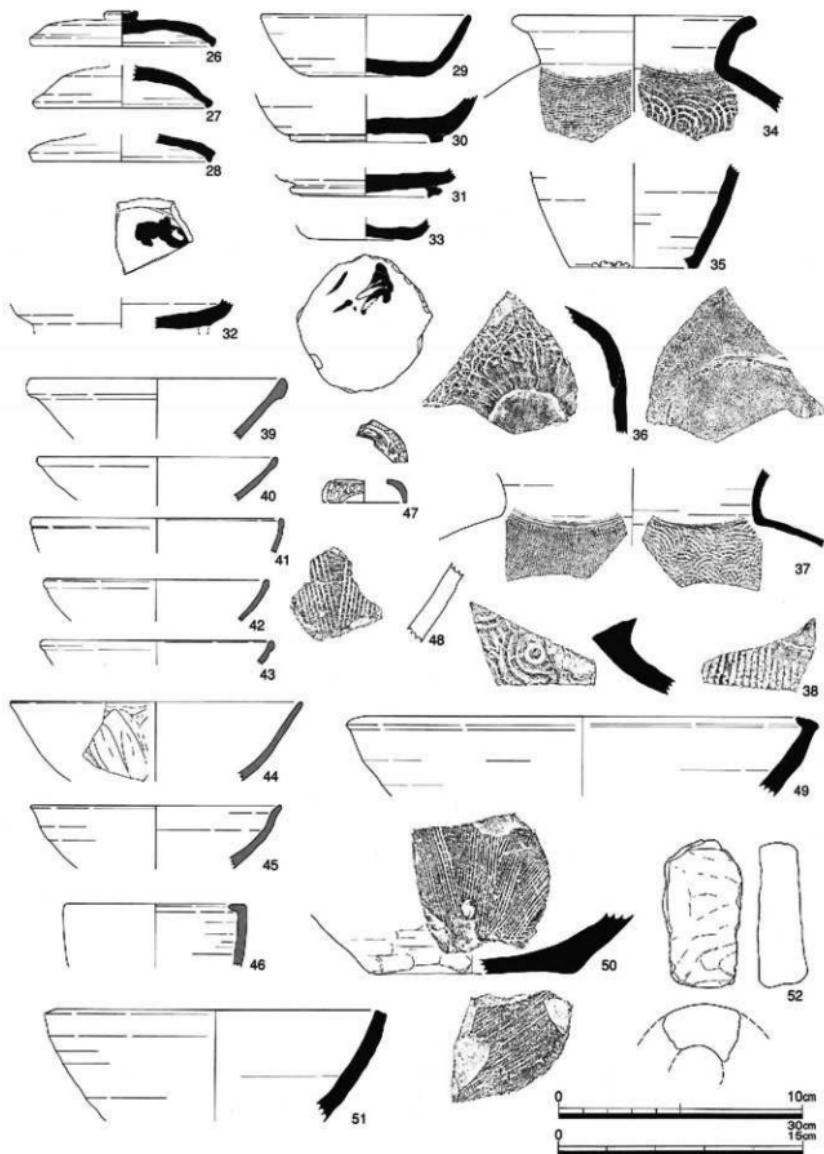
第19図 観林遺跡3地区の遺物(3) (S=1:3)

SD01(1~25)



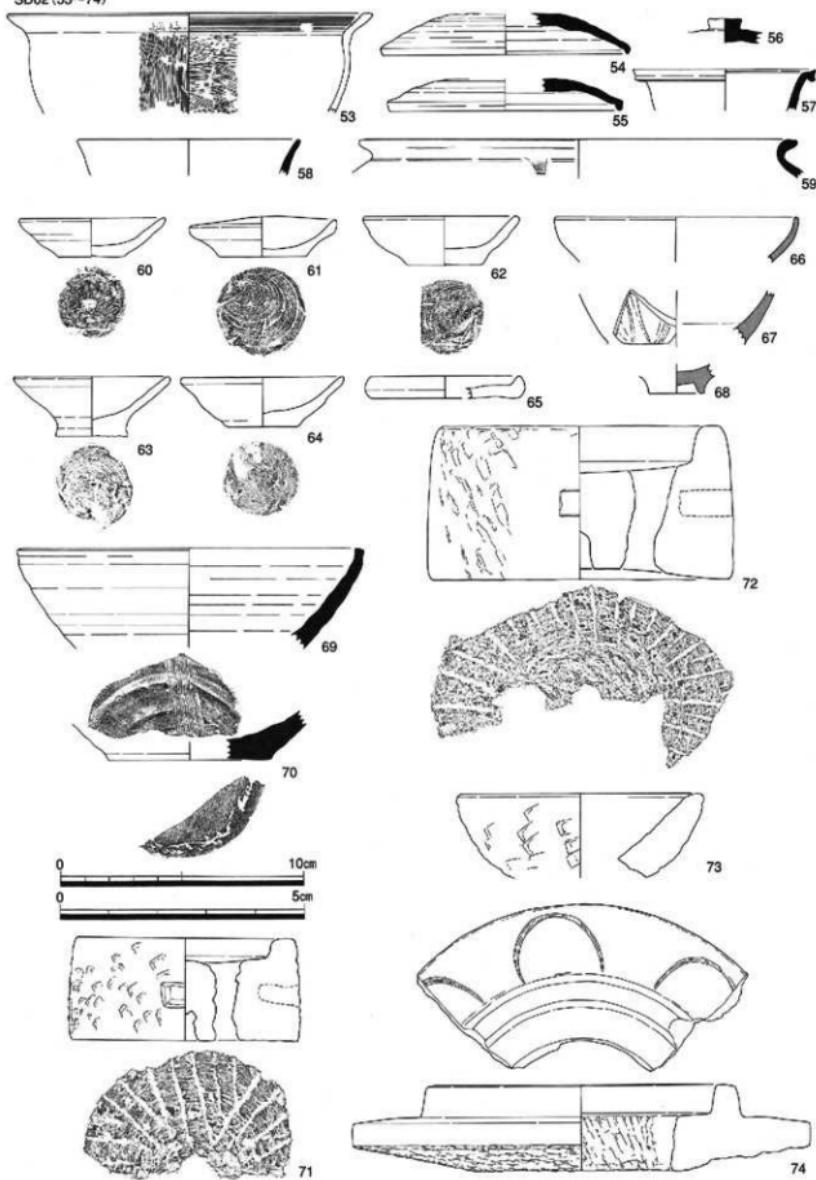
第20図 寺家廐寺跡1地区の遺物 (1) (S=1:3)

SD01(26~52)

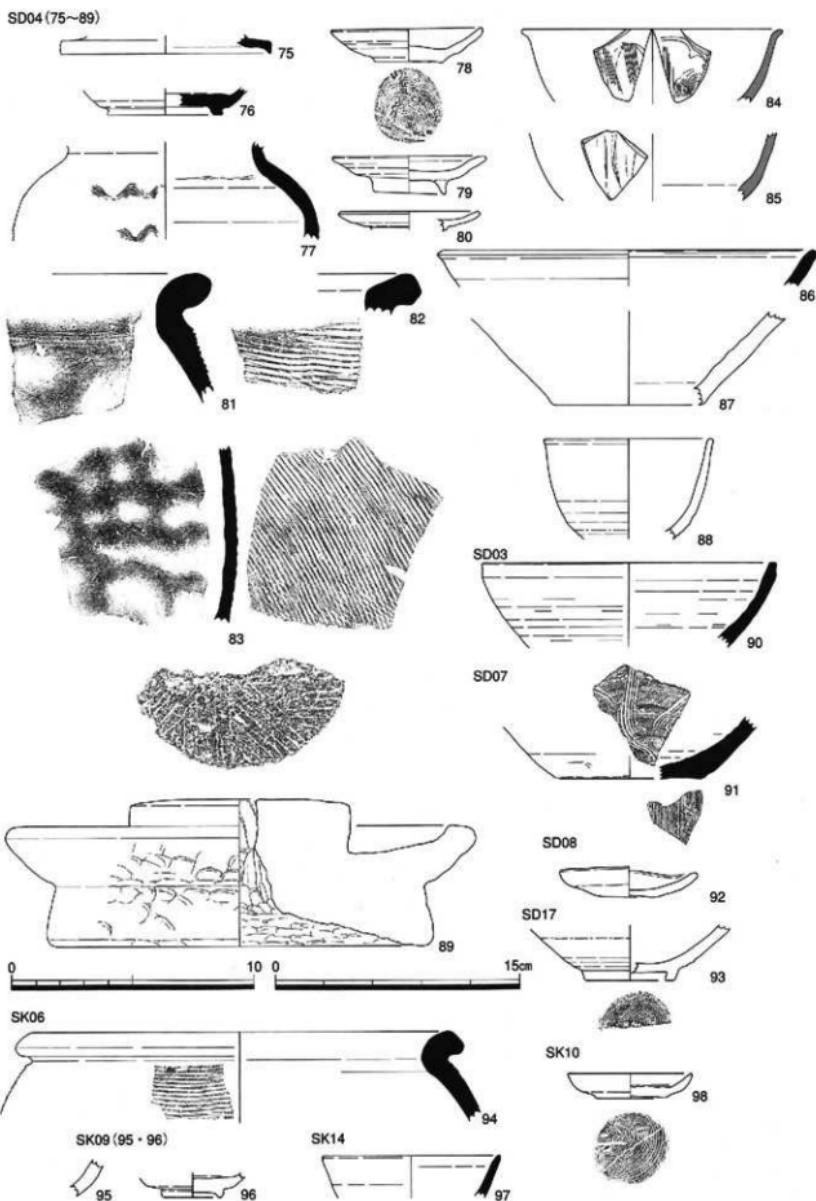


第21図 寺家廐跡1地区の遺物 (2) 34~36(S=1:4) 37(S=1:6) 26~33, 38~52(S=1:3)

SD02(53~74)

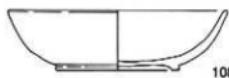
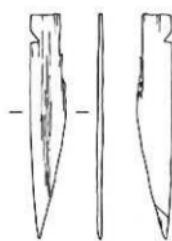
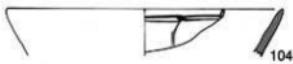
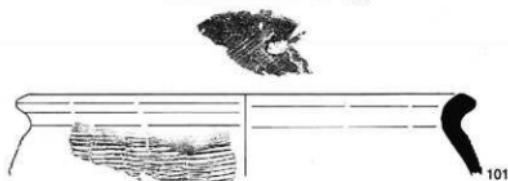
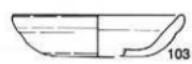
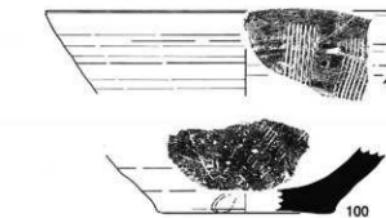


第22図 寺家庵寺跡1地区の遺物（3） 53・69・70(S=1:4) 59・71～74(S=1:6) 54～68(S=1:3)



第23図 寺家廐寺跡1地区の遺物(4) 86・87・89～91・94(S=1:4) 75～85・88・92・93・95～98(S=1:3)

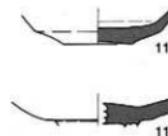
SK01 (99~108)



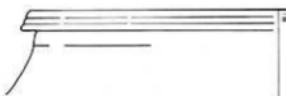
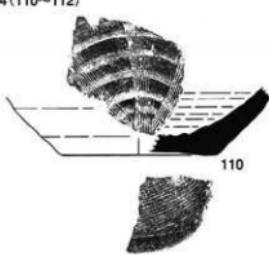
SK02



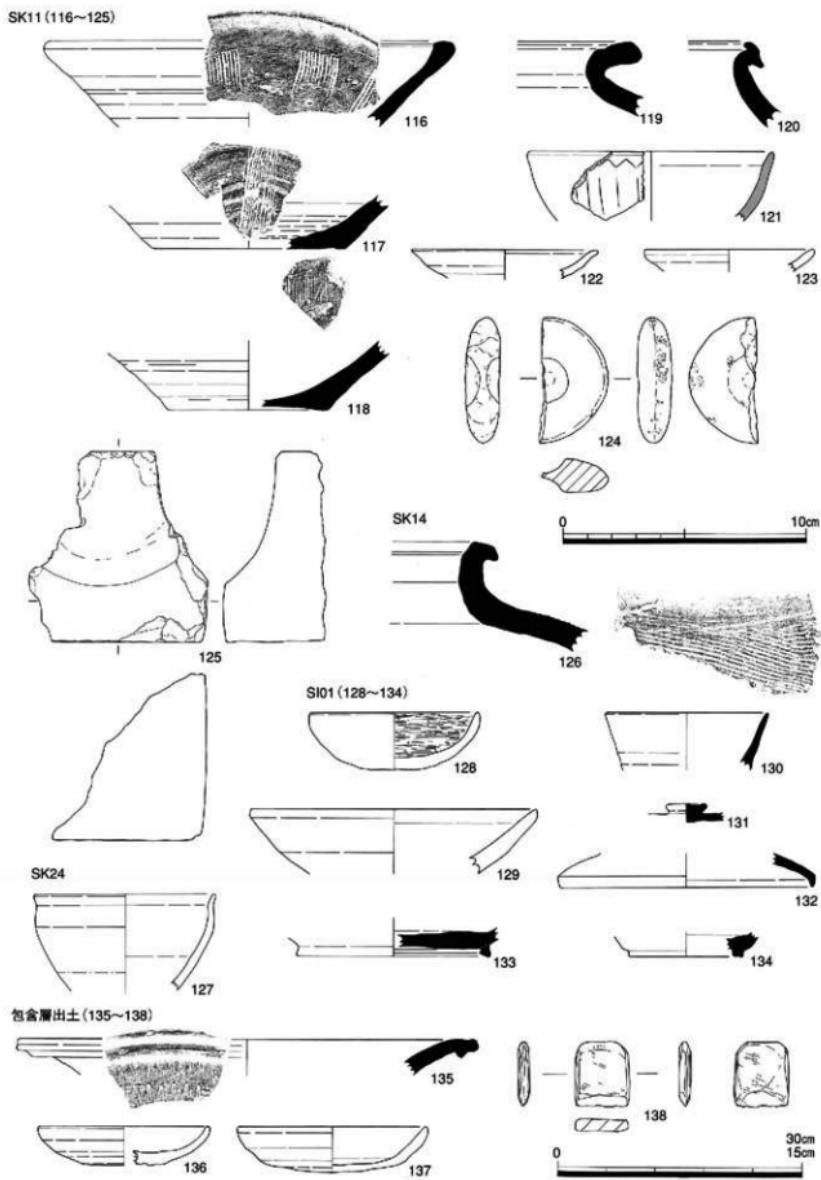
SK05 (114~115)



SK04 (110~112)



第24図 寺家廐寺跡1地区の遺物(5) 99~101・108~110(S=1:4) 112(S=1:6) 102~107・111・113~115(S=1:3)



第25図 寺家廐寺跡1地区の遺物 (6) 116~118・124・135 (S=1:4) 125 (S=1:6) 119~123・126~134・136~138 (S=1:3)



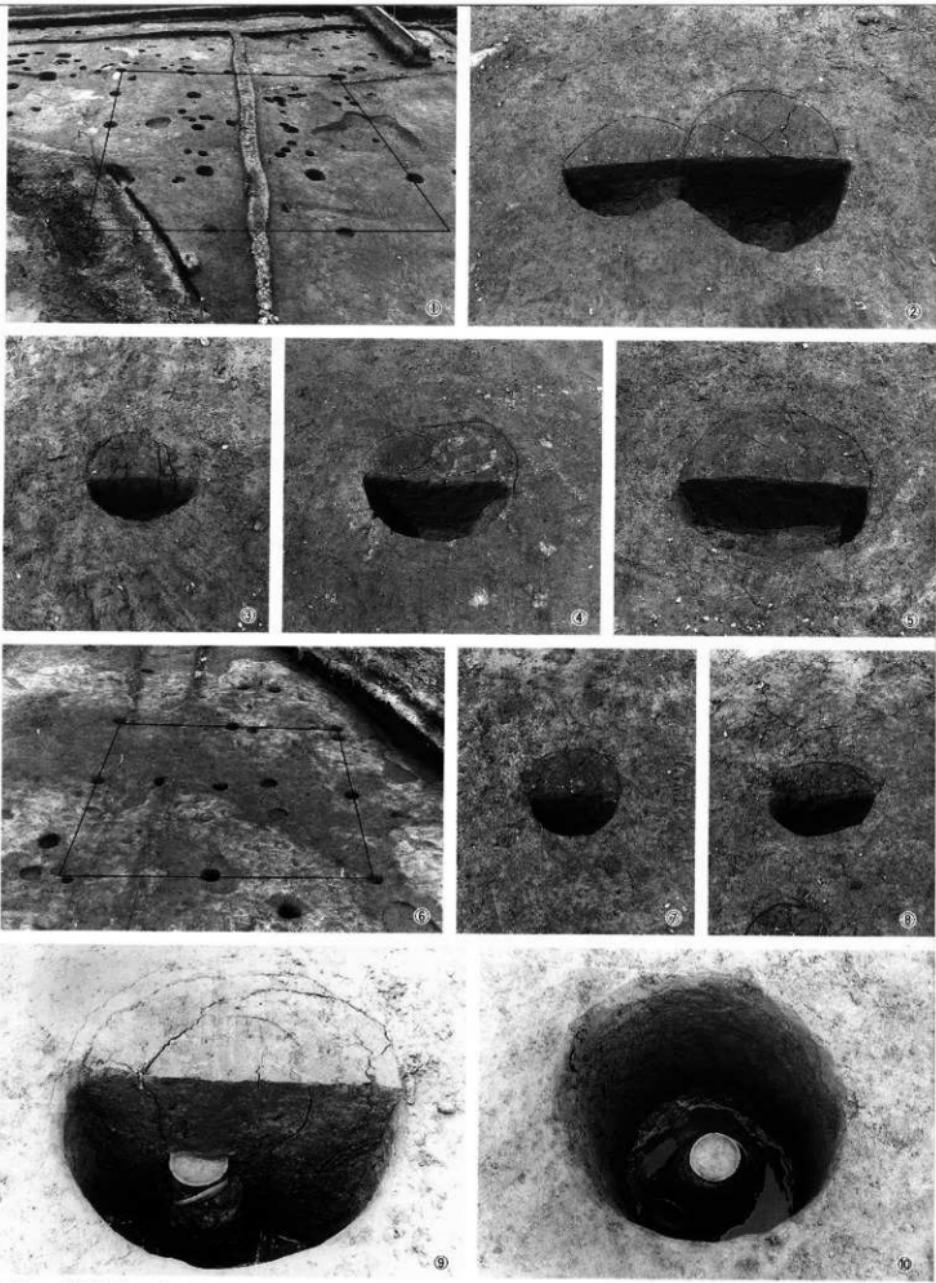
①



②

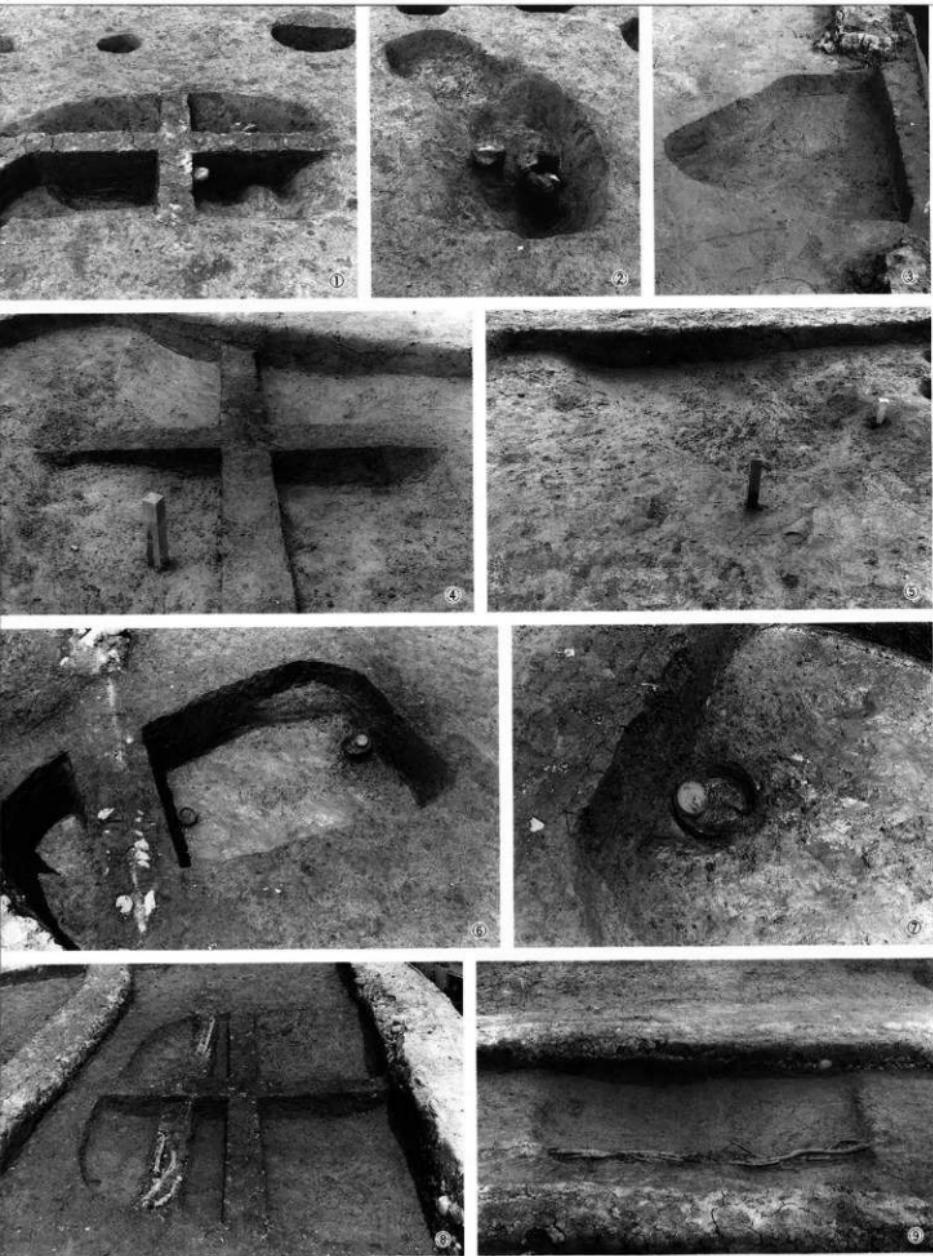
図版1 院林遺跡3地区全景

①遠景（東から） ②調査区全景（真上から）



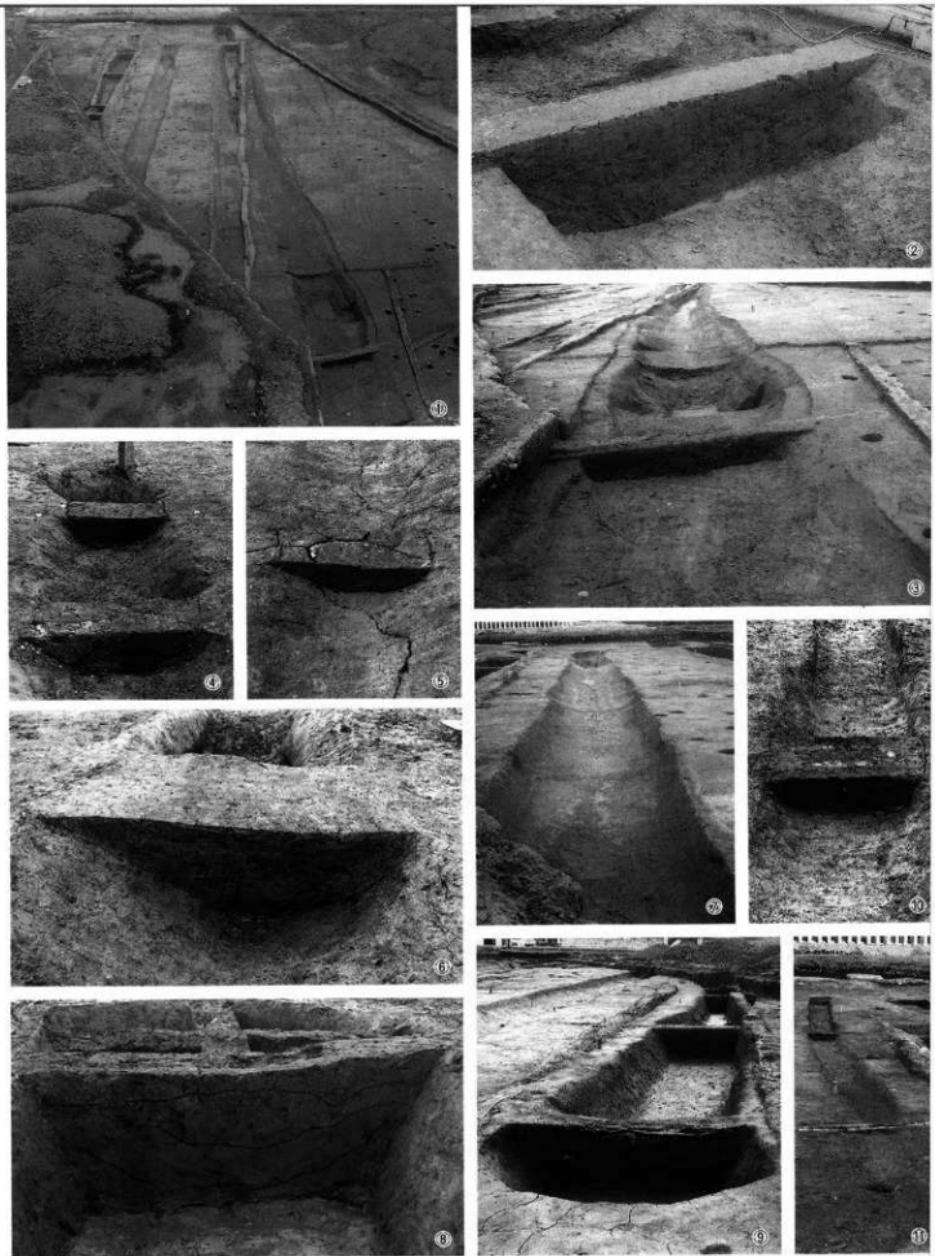
図版2 院林遺跡3地区の遺構(1)

- ①SB01(東から) ②SB01-P11 ③SB01-P5 ④SB01-P12 ⑤SB01-P17
- ⑥SB02(西から) ⑦SB02-P2 ⑧SB02-P6 ⑨P91土層 ⑩P91遺物出土状況



図版3 肥林遺跡3地区の遺構(2)

- |            |              |                    |          |
|------------|--------------|--------------------|----------|
| ①SK01 土層   | ②SK01 遺物出土状況 | ③SK03 完掘状況         | ④SK02 土層 |
| ⑤SK02 完掘状況 | ⑥SK06 遺物出土状況 | ⑦SK06 漆器椀・土師器皿出土状況 |          |
| ⑧SK07 土層   | ⑨SK07 完掘状況   |                    |          |



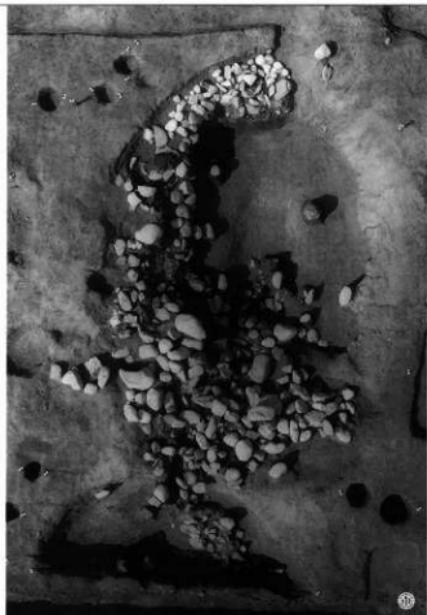
図版4 諏林遺跡3地区の遺構(3)

- |                  |                |                |
|------------------|----------------|----------------|
| ①SD01、05~07(西から) | ②SD01土層        | ③SD01完掘状況(西から) |
| ④SD02土層          | ⑤SD04土層        | ⑥SD05土層        |
| ⑧SD06土層          | ⑨SD06完掘状況(東から) | ⑩SD07土層        |
|                  |                | ⑪SD07完掘状況(西から) |



図版5 寺家廃寺跡1地区の遺構（1）

①寺家廃寺跡1地区全景（東から） ②SD01 ③X24~31、Y23~34部分（南から）



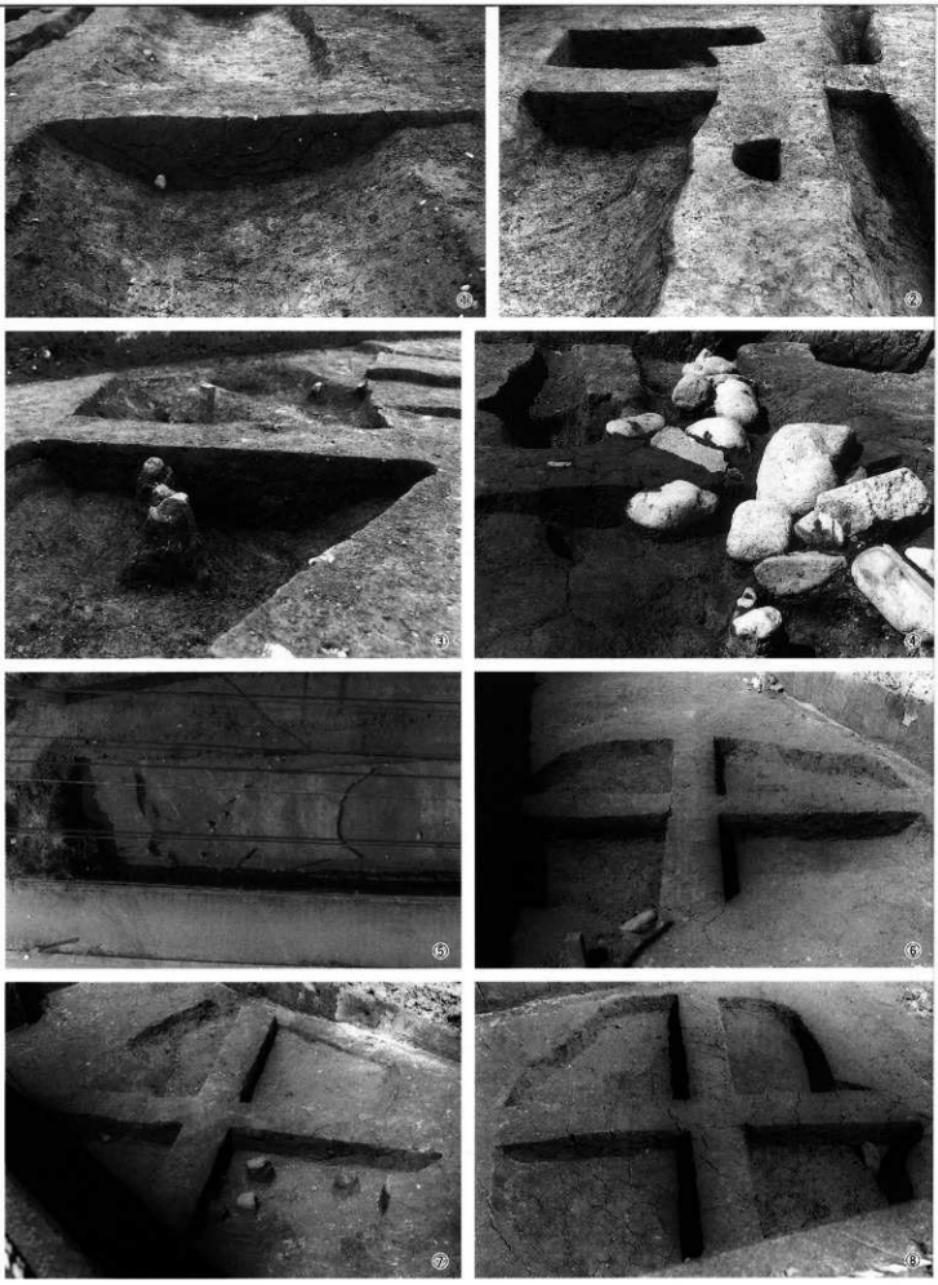
図版 6 寺家廃寺跡 1 地区の遺構 (2)

- ①SK01 ②SK01土層（北から） ③SK01土層（東から） ④SK01完掘状況  
⑤SK05土層（東から） ⑥・⑦SK01漆器椀出土状況



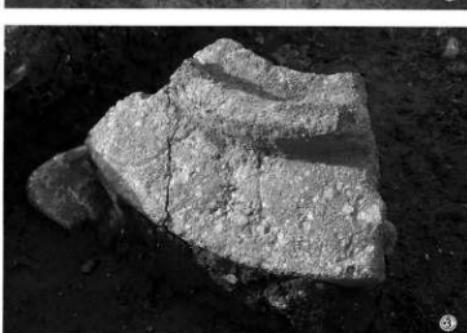
図版7 寺家庵寺跡1地区の遺構(3)

①SK02土層(南から) ②SK02土層(東から) ③SK06・07・08土層(南から) ④SK03・04土層(南から)  
 ⑤SK08・10土層(東から) ⑥SK06・07土層(東から) ⑦SK09土層(東から) ⑧SD01遺物出土状況



図版8 寺家廃寺跡1地区の遺構(4)

- ①SD02土層(東から)
- ②SD03・04土層(東から)
- ③SD05土層(南から)
- ④SD10・11土層(南から)
- ⑤SI01・02
- ⑥SI02土層(東から)
- ⑦SI01土層(南から)
- ⑧SI02土層(南から)



図版9 寺家廐寺跡1地区の遺構（5）

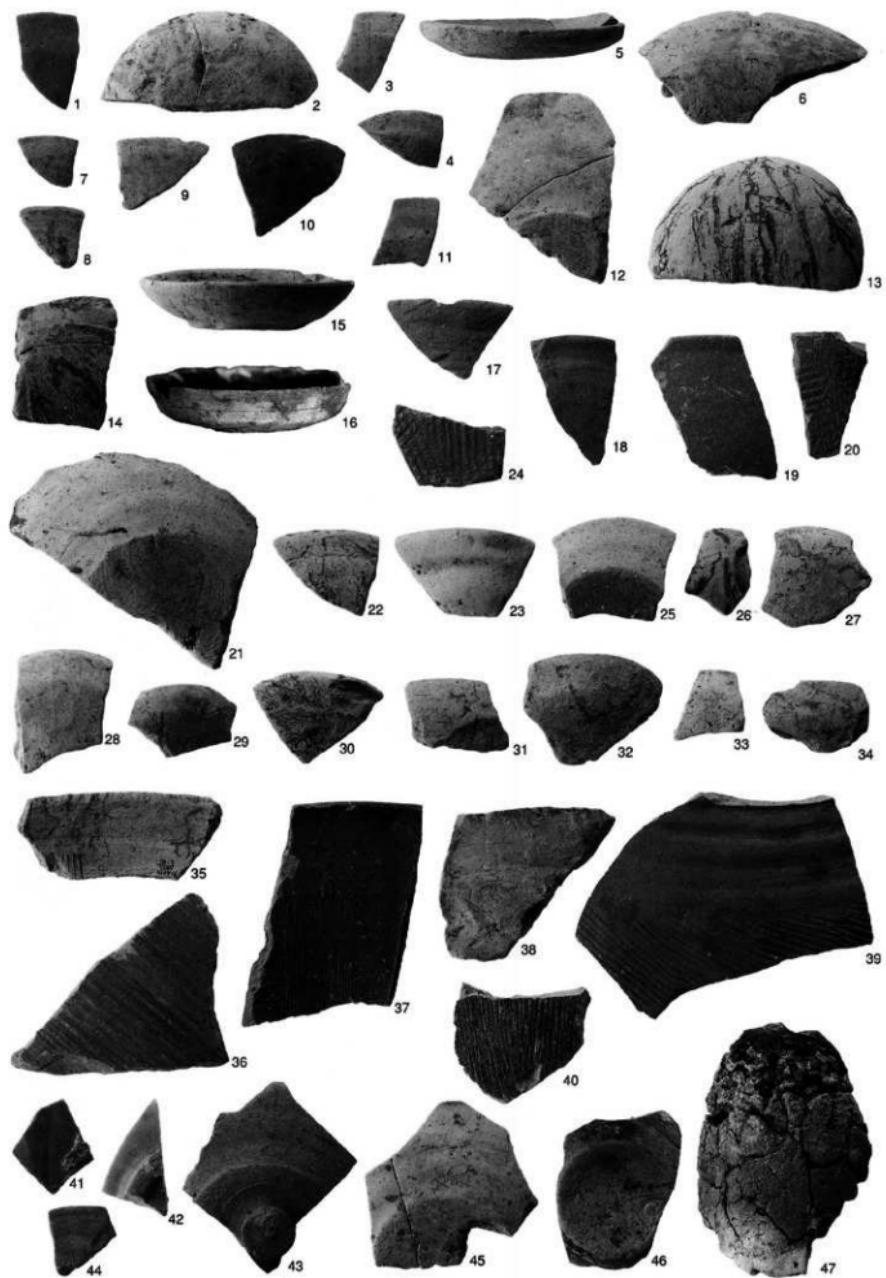
①X25~31、Y3~23部分（東から）  
④SK11（南から） ⑤SK11完掘状況（南から）

②SD02土層（東から） ③SD02石製品出土状況  
⑥SK11土層（南から） ⑦SK11土層（東から）



図版10 寺家廐寺跡1地区の遺構（6）

- ①X24～26、Y3～10部分（西から） ②SK15・16（北から） ③SK14（北から） ④SK24（東から）  
⑤遺構掘削状況 ⑥図面作成状況 ⑦空撮 ⑧南砺市指定文化財皇孫塚（礎石）



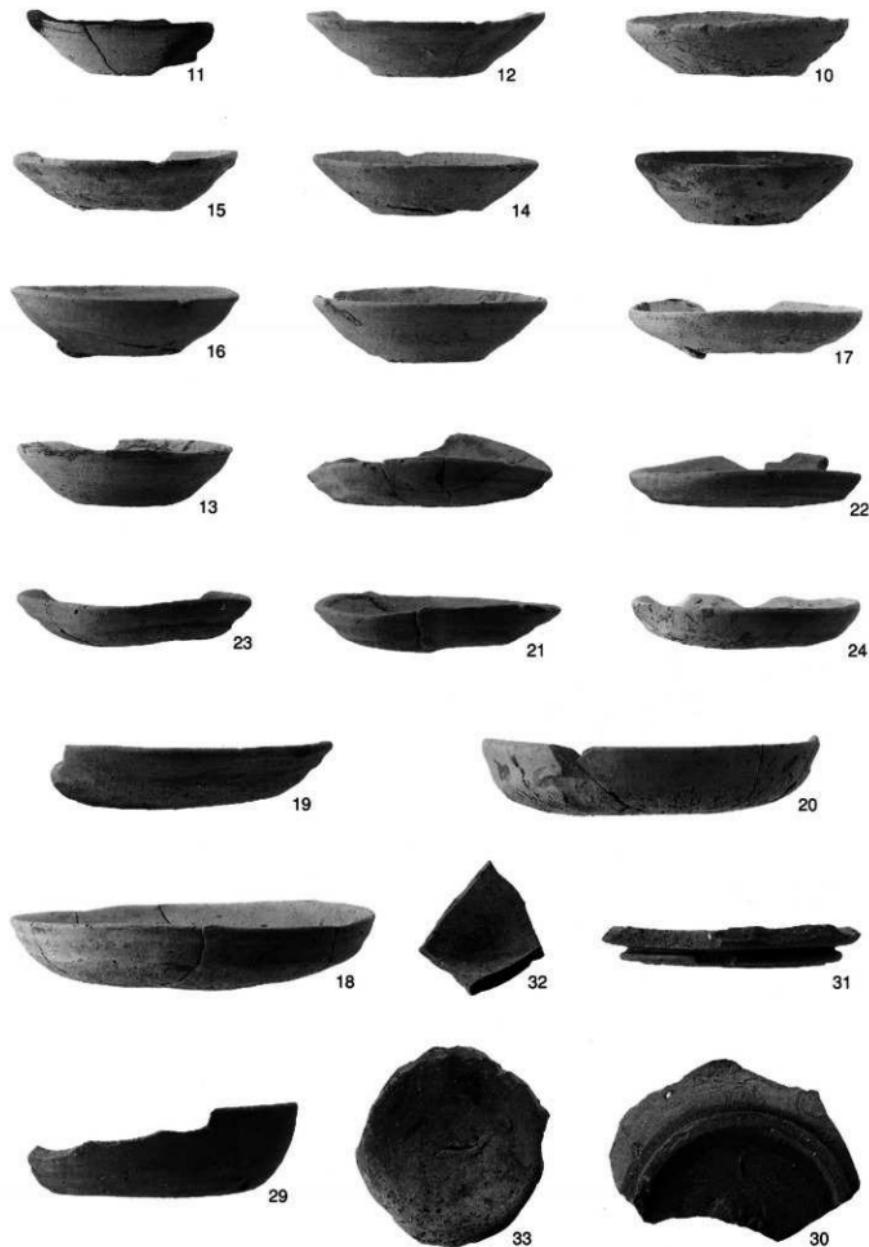
図版11 院林遺跡3地区の遺物(1) (S=1/2)



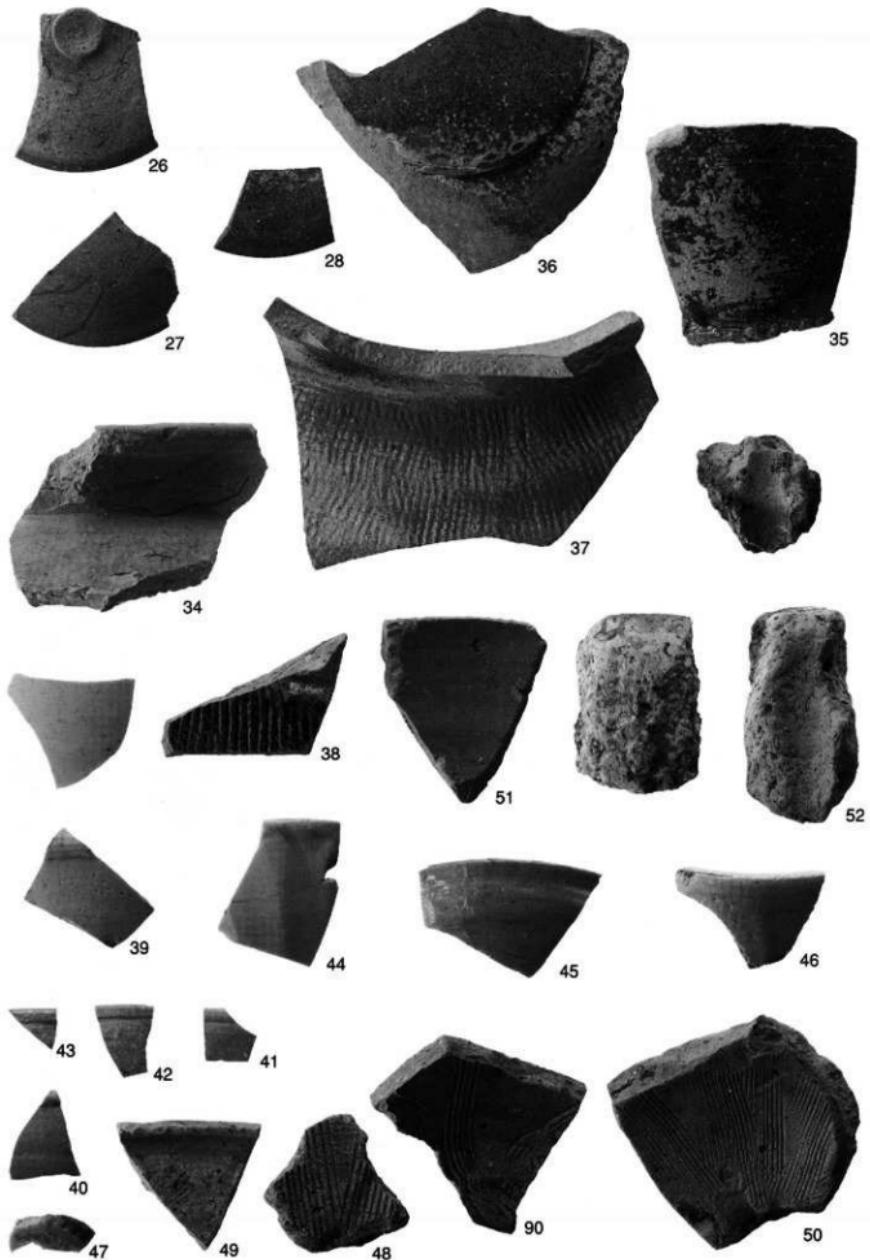
図版12 院林遺跡3地区の遺物(2) (S=1/2)



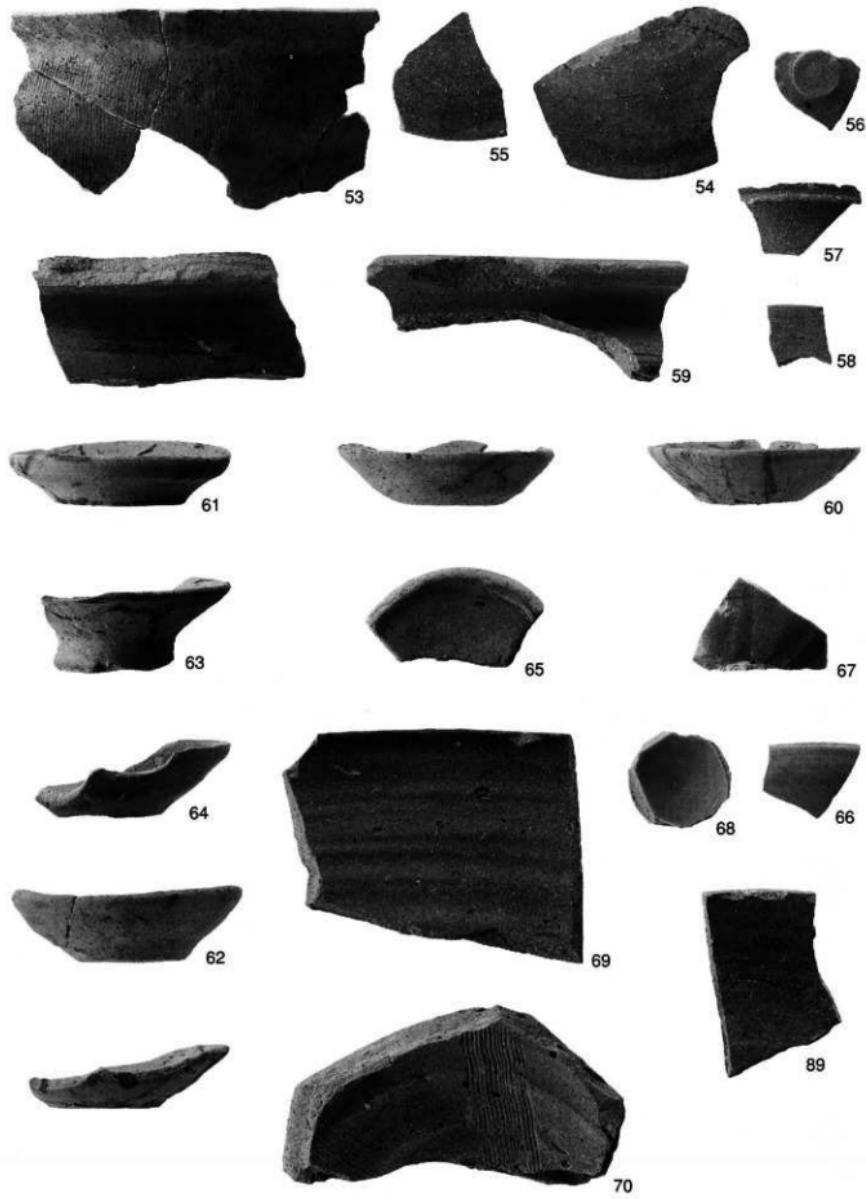
図版13 寺家廃寺跡1地区の遺物 (1) ( $S=1:2$ )



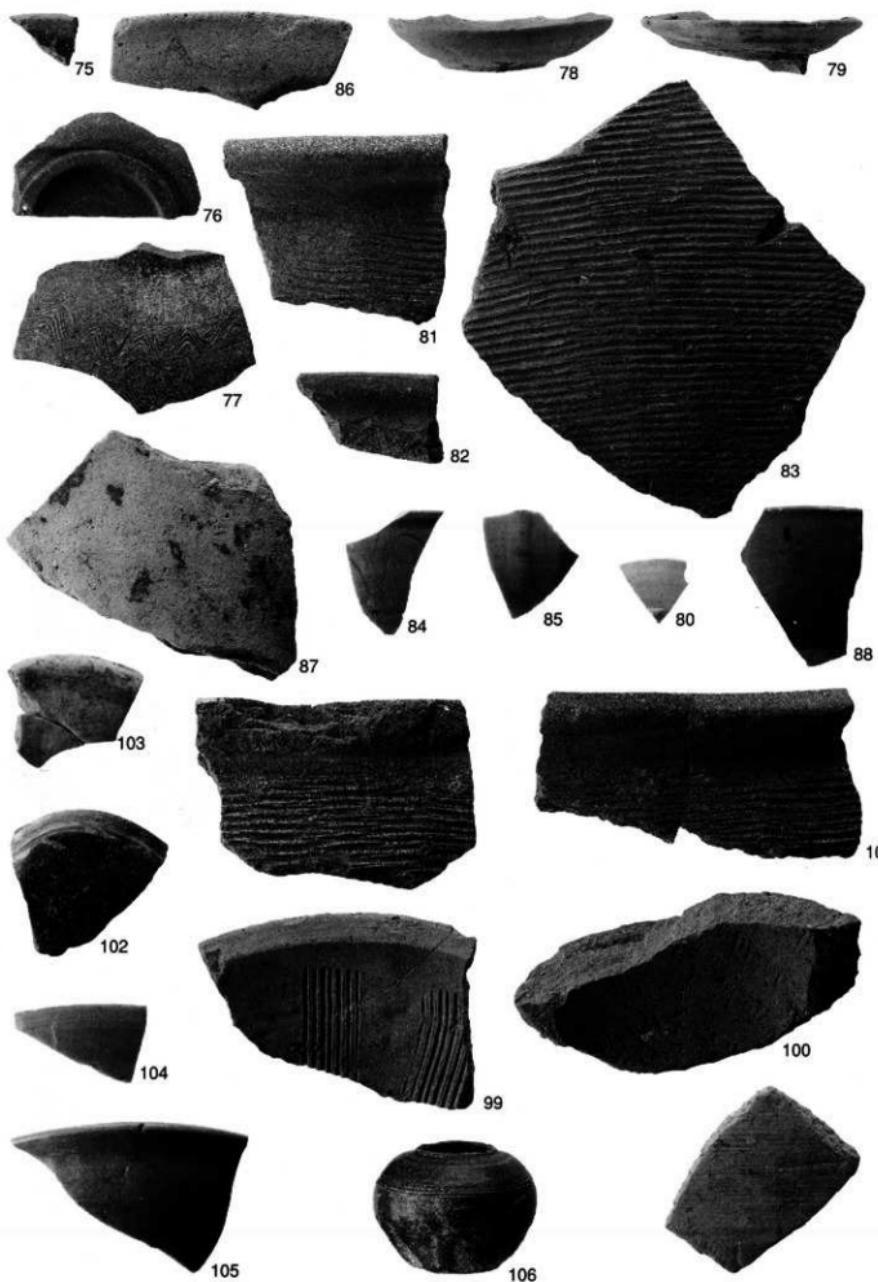
図版14 寺家廃寺跡1地区の遺物(2) (S=1:2)



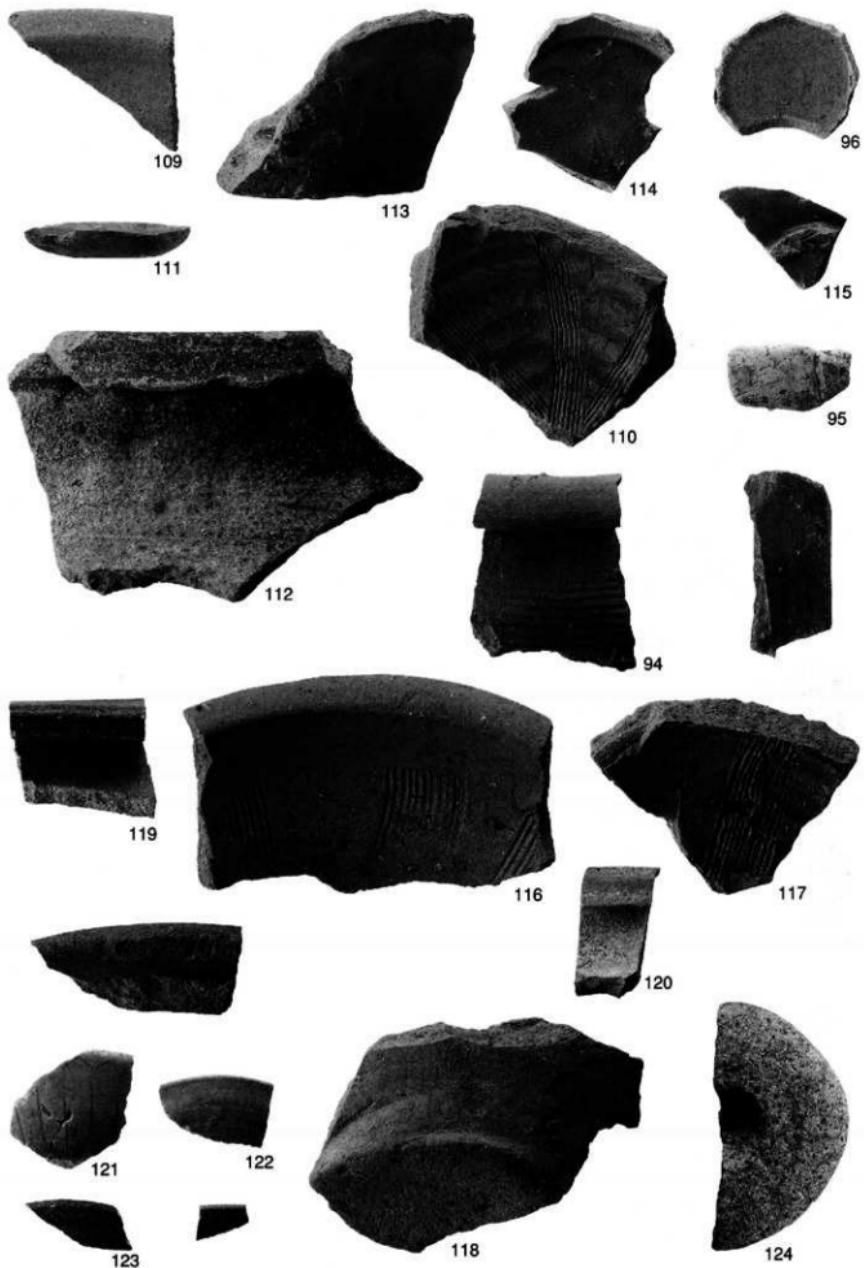
図版15 寺家廃寺跡1地区の遺物（3）（S=1:2）



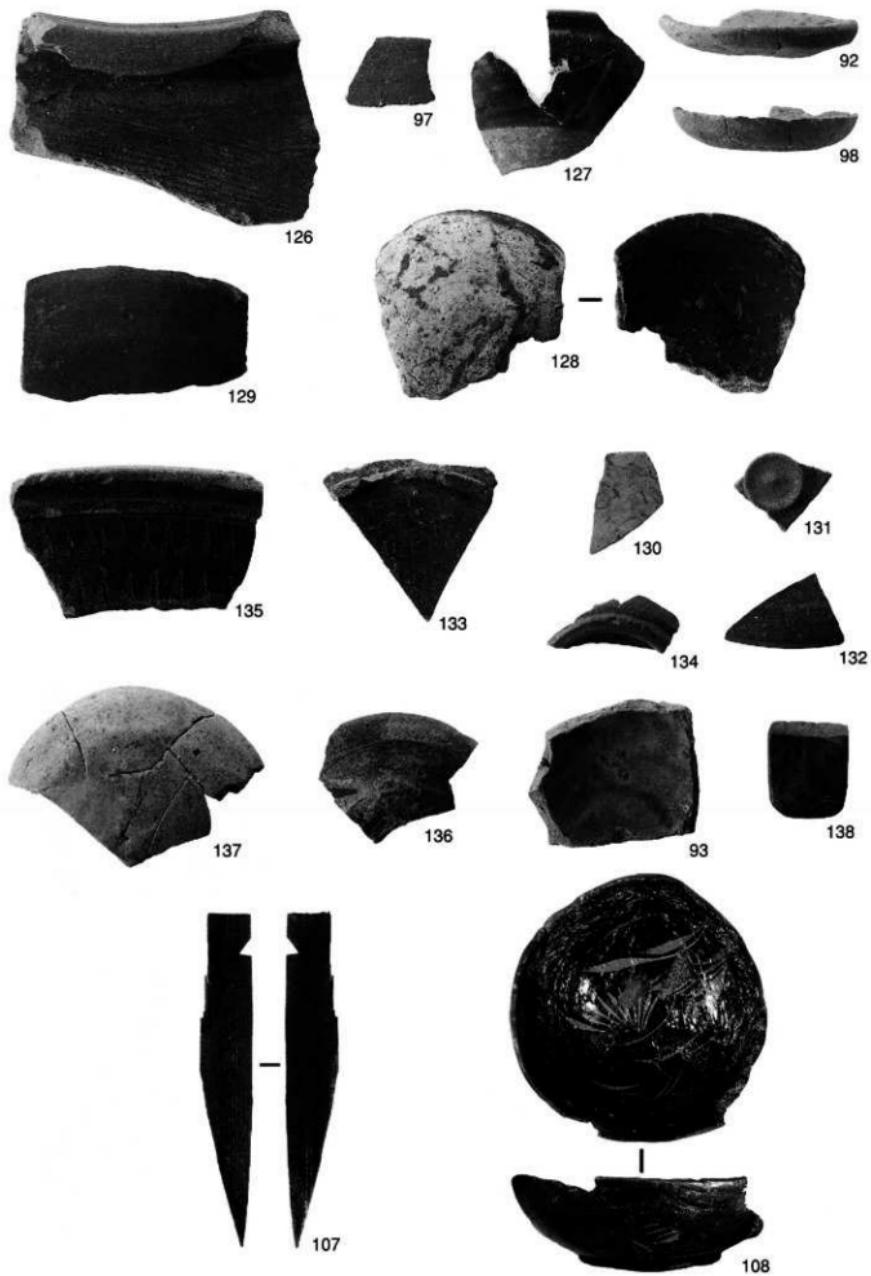
図版16 寺家廐寺跡1地区の遺物(4) (S=1:2)



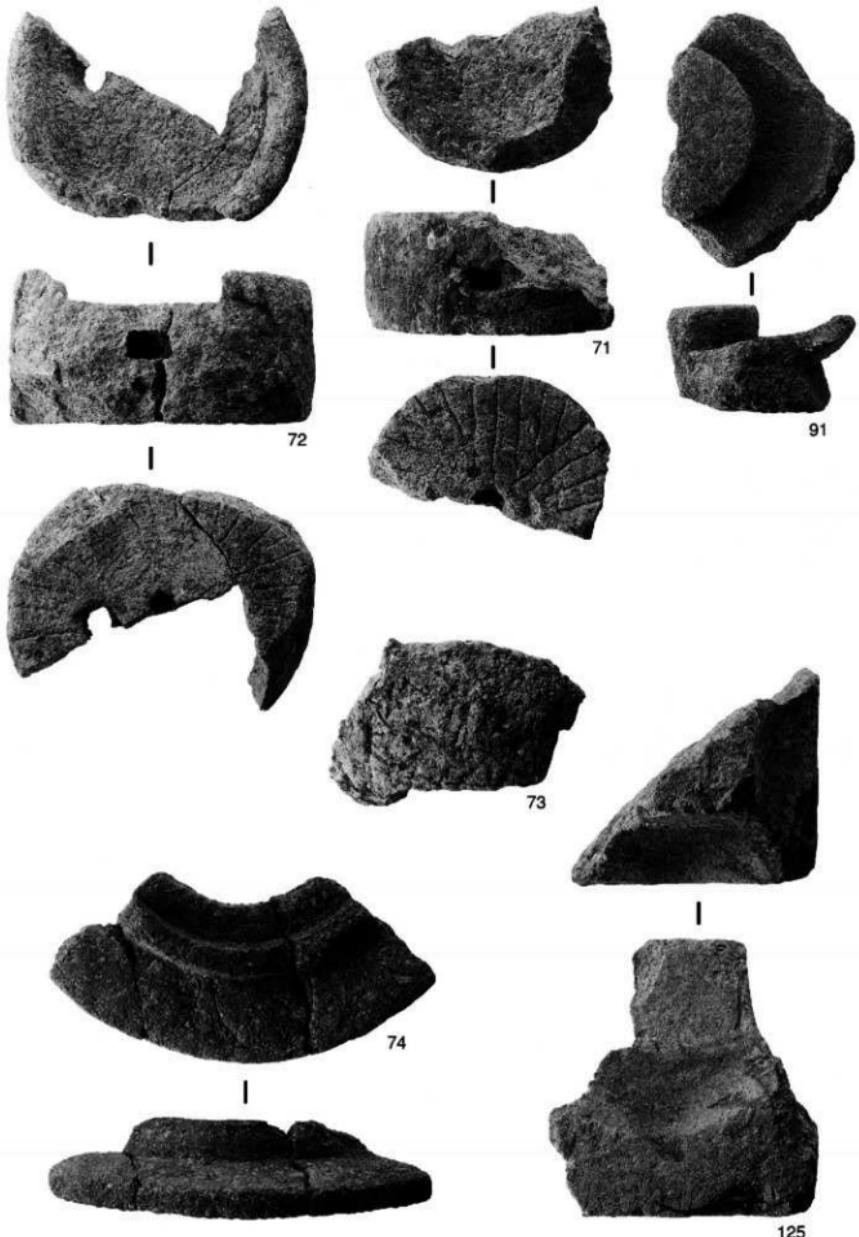
図版17 寺家廃寺跡1地区の遺物(5) (S=1:2)



図版18 寺家廃寺跡1地区の遺物（6）（S=1:2）



図版19 寺家廃寺跡1地区の遺物 (7) 108 (S=1:3) その他 (S=1:2)



図版20 寺家廃寺跡1地区の遺物(8)

71、74、91 (S=1:5) 73、125 (S=1:4) 72 (S=1:6)

# 報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとし いんばやしいせきに じけはいじあといち
書名	富山県南砺市院林遺跡Ⅱ 寺家廃寺跡I
副書名	主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書23
編著者名	佐藤聖子 片田亜紀
編集機関	南砺市教育委員会
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL(0763)23-2014
発行年月日	西暦2008年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
院林遺跡	富山県 南砺市院林	16210	244	36度35分 3秒	136度54分 32秒	070501 ~070709	1,560m <sup>2</sup>	主要地方道 砺波福光線 道路改良工事
寺家廃寺跡	富山県 南砺市寺家	16210	243	36度35分 4秒	136度54分 48秒	070628 ~071102	1,460m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
院林遺跡	集落	古代	柱穴			須恵器、土師器、土鍤		
		中世	掘立柱建物、土坑、溝			中世土師器、珠洲、青磁、 越中瀬戸、ふいごの羽口		
		近世	土坑、河跡			近世陶磁		
寺家廃寺跡	寺社	古代	柱穴、土坑、河跡			須恵器、土師器		
		中世	柱穴、土坑、溝			中世土師器、珠洲、瀬戸、 越前、越中瀬戸、白磁、 青磁、漆器椀、人形、石臼		
		近世				近世陶磁		

## 院林遺跡Ⅱ 寺家廃寺跡Ⅰ

—主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う  
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)—

平成20年3月18日

編集発行 南砺市教育委員会

印刷牧印刷株式会社

